コミュニティ、サードプレイス、ラーニング・コミュニティと実践共同体

松　本　雄　一

要　旨

本論文ではコミュニティ概念、「サードプレイス（the third place）」論、「プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ」（professional learning community）概念と、実践共同体（communities of practice）の概念について検討する。実践共同体を深く理解するにあたっては、コミュニティ概念のダイナミズムを理解することが不可欠である。実践共同体がコミュニティ研究のどのような部分を受け継ぎ、学習を促進する要因にしているのかを、広範なレビューをもとに議論する。

キーワード： 実践共同体（communities of practice）、コミュニティ（community）、サードプレイス（the third place）、ラーニング・コミュニティ（learning community）、プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ（professional learning community）

I　はじめに

本論文ではコミュニティ概念、「サードプレイス（the third place）」論、「プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ」（professional learning community）概念と、実践共同体（communities of practice）の概念について検討する[1)]。実践共同体を深く理解するにあたっては、コミュニティ概念のダイナミズムを理解することが不可欠である。実践共同体もコミュニティ研

1）　本論文では「共同体（community）」を「コミュニティ」と表記することで、実践共同体概念との違いをわかりやすくしている。共同体とコミュニティは同義とする。

究をある程度応用していると考えられるが、実際にはコミュニティがどのように学習を促進するかという問題については、特に実践共同体研究においては議論が十分であるとはいえない。本論文ではこれまでのコミュニティ研究を概観し、そもそも既存のコミュニティと実践共同体はどこが同じでどこが違うのか、またどのようなメカニズム、どのようなダイナミズムが実践共同体の目的である学習活動の促進につながっているのかについて考察する。あわせて本論文では「ラーニング・コミュニティ」研究についてもみていく。松本（2015a）において若干議論しているが、まさに「学習のコミュニティ」という名の本概念は、実践共同体とどこが同じでどこが違うのか、改めて整理しておく必要があるであろう。

Ⅱ　コミュニティ研究

1．コミュニティの定義

コミュニティ概念は「社会学でもっともわかりにくく、あいまいな語の一つで、現在に至るまでほとんど意味が確定していない」[2] とされる。その影響が実践共同体にも影響しているといえる。そんな中で Abercrombie, Turner and Hill（2006）は、最低限の意味として「一定の地理的区画における人々の集合」をあげ、その付加的要素として３つの要素、すなわち、①コミュニティはある特殊な社会構造をもった人々の集合を指して使われることがある。すなわち、言い換えればコミュニティではない人々の集合があるということである。この考え方はコミュニティを農村社会または前産業社会と同じだと見ることである。さらに、都市社会または産業社会をコミュニティの失われた社会と見ることである、②所属もしくは共同精神のこと。③コミュニティにおけるすべての日常的活動は労働であれ非労働的なことであれ、一定の地理的領域で行われている。つまりその意味で自足的である、があるとし、これらの３つの要素のいずれか、もしくは全部を含む」としている[3]。

2）　Abercrombie, Turner and Hill（2006：邦訳）、75ページ。
3）　Abercrombie, Turner and Hill（2006：邦訳）、75-76ページ。

Mitchell（1979）はコミュニティの意味が変遷していることを指摘している。コミュニティは「元来ある地理的な領域に居住する人々の集合体を意味するものであった」が、人口移動の増加やマスメディアの普及とともに、「人々が達成しようとする目標としてのコミュニティという観念が顕著になってきた」とする。そこからコミュニティが利益共同体（community of interests）を意味するものとみなされることもあり、その用語が故意にあいまいな形で用いられることもあるとする[4)]。この意味の変遷や扱われ方が、コミュニティ概念の定義の曖昧性につながっている。

これらの辞書的な定義からは、コミュニティがある程度自足的で共同精神を持っていること、しかし環境の変化と共にその意味が変遷してきていることがわかる。これらの地域共同体的な語義をもつコミュニティをそのまま援用していては、実践共同体の本質に近づくことは難しいであろう。したがってさらにコミュニティ研究を検討する必要があるのである。

Hillery（1955）は、コミュニティの定義について広範なレビューを行い、コミュニティの定義を扱った研究は94あるとした上で、表１のようにその特徴を明らかにしている。

その上で Hillery（1955）は、定義を分類した上で、すべての定義に完全に共通する特性は人々が集まっていること以上のものは見いだせなかったこと、ほとんどの定義はある特定の地域を基盤の要素として考えていること、コミュニティの概念は大きく社会的相互作用として捉えられ、共通の結びつきの地域と社会的相互作用がコミュニティの構成要素としてみられること、地方のコミュニティでは社会的相互作用か共通の紐帯による地域が見いだされることを明らかにしている[5)]。多くの研究を検討した結果であり、Hillery（1955）のあげた特定の地域、社会的相互作用、共通の結びつき・紐帯は、コミュニティの要素として考えてよいであろう。

4）　Mitchell（1979：邦訳）、52ページ。
5）　Hillery（1955），p.119.

表１　コミュニティの定義の分類[6)]

定義において言及されている区別できるアイディアや要素	定義の数
Ⅰ．一般的コミュニティ	
Ａ．社会的相互作用	
１．地理的地域	
ａ．自己充足性	8
ｂ．共通の生活	9
⑴血縁関係	2
ｃ．種への意識	7
ｄ．共通の目的、規範、意味など	20
ｅ．制度の集合	2
ｆ．ローカルな集団	5
ｇ．個別性	2
２．地域よりも共通の特徴の存在	
ａ．自己充足性	1
ｂ．共通の生活	3
ｃ．種への意識	5
ｄ．共通の目的、規範、意味など	5
３．社会的システム	1
４．個別性	3
５．態度の全体性	1
６．プロセス	2
Ｂ．生態的関係性	3
Ⅱ．地方のコミュニティ	
Ａ．社会的相互作用	
１．地理的地域	
ａ．自己充足性	1
ｂ．共通の生活	3
ｃ．種への意識	3
ｄ．共通の目的、規範、意味など	3
ｅ．ローカルな集団	5
計	94

6）Hillery（1955），pp.114-115 を参考に、筆者作成。定義を導出した研究者については紙幅の都合上割愛した。

中村（1973）は、コミュニティの多義性について言及した上で、その特性を次のように６つあげている[7]。

⑴　一定範囲の場所。この範囲も１つの都市、町、村などやその一部の範囲を指すことが多いとしても、都市についてはそれが大都市であれば、その内部の一部の範囲であることがあり、また逆にその大部分の勢力圏内に入る周辺諸都市と農村地域のすべてを含む範囲を指す場合もある。ときには１つの国の全域であったり、あるいはいくつかの国々の集まりを指し、さらに進んで世界の全域を含むこともある。

⑵　右のような一定範囲の場所に住む人々の集まり。ときには集まっているのが人々ではなく動植物の場合もある。

⑶　何らかの共通の事物、共通のつながり、あるいは相互関連性を持つものの集まり。共通の事物、交通のつながりというのが、同じ職業についているとか同じ信条を持つということであったり、あるいは同じ範囲の場所に住むということであったりする。

⑷　右の場合の共通の事物や共通のつながり自体を指す。事物には共有財産とか村落における共有地のように可視的なものであることもあれば、価値体系、信仰、理念とか、あるいは慣習や規範とか共同の行動であったりする。

⑸　共通の事物やつながり、あるいは相互関係を持つものが人間ではない場合。動植物であれば⑵の意味の場合の一部と同義となり、国の場合は⑴の一部と合致する。

⑹　以上はすべて経験的事実を指すものであるが、このほかに、諸個人の間に期待される望ましい相互関係や一体感を意味することも多い。

中村（1973）の６特性は厳密な定義に基づいて一定範囲の場所、共通の事物・つながり・相互関連性、およびそれらによる人の集まりに加えて、社会

7）　中村（1973）、27-29ページ。

からの期待としての望ましい相互関係や一体感も加えられている。コミュニティ概念に対する社会や個人の期待感を考慮している。

広井（2010）は、コミュニティを「人間が、それに対して何らかの帰属意識をもち、かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助（支え合い）の意識が働いているような集団」と定義した上で、コミュニティをみていく上での３つの視点を提示している。１つめは「生産のコミュニティ」と「生活のコミュニティ」である。両者は農村社会においては一致していたが、産業化の進展に伴って分離していったこと、経済の成熟化に伴って生産のコミュニティ（企業）の優位性が低下し、相対的に生活のコミュニティの重要性が注目されていることを示している[8)]。両者の分離という問題は実践共同体にも一定の示唆を与える。２つめは「空間的コミュニティ（地域コミュニティ）」と「時間的コミュニティ（テーマコミュニティ）」である。地域コミュニティは居住地域を基盤にしたコミュニティであるが、近代化にともなって低下を続けている。それに対して広井（2010）は、長期的な人口変化のトレンドをみていくと、今後は地域への土着性が強い子どもと高齢者の人口が増え、地域コミュニティの重要性が高まると指摘している[9)]。また黒澤（2010）は、現在は交通や通信・インターネットの発達により、地域を越えたコミュニティ、「テーマコミュニティ」[10)] の形成が可能になっていると指摘している。実践共同体はこの「テーマコミュニティ」の性格を有していると考えられる。しかし黒澤（2010）は、テーマコミュニティはある種の疎外的な性格を持っていること、子どもと高齢者は参加することが難しいことをあげている[11)]。地域コミュニティとテーマコミュニティは選択的に考えるのではなく相補的

8） 広井（2010）、13-14ページ。
9） 広井（2010）、16-17ページ。
10）地域コミュニティとテーマコミュニティの区分は、横浜市企画局政策部調査課（1996）に始まるとされる（三船・まちづくりコラボレーション、2009、264ページ）。テーマによって結びついた自主的活動グループが地域コミュニティの生活におけるさまざまなニーズや問題を自主的に解決し、生活環境をよくする動きを起こしているとしている（15ページ）。
11）黒澤（2010）、187-188ページ。

に考えるべきであろう。広井（2010）の指摘する３つめの視点は、「農村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」である。これは人と人との関係性のあり方を示したものであり、前者は「共同体に一体化する（ないし吸収される）個人」、後者は「独立した個人と個人のつながり」を象徴しているとする（表２）。そして戦後日本においては農村型コミュニティのような関係性を構築していったが、現在はその人々の孤立と過当競争・生産過剰といった悪循環をもたらしているとし、今後は都市型コミュニティのような関係性を構築することが課題であると指摘している[12)]。実践共同体はどちらかというと都市型コミュニティに近い性格を持っているが、農村的コミュニティのよさも取り入れるべき概念であると考えられる。

表２　コミュニティの形成原理の２つのタイプ[13)]

	ⒶⒶ“同心円を広げてつながる”	ⒷⒷ“独立した個人としてつながる”
その根拠	「共同体的な一体意識」	「個人をベースとする公共意識」
性格	情緒的（＆非言語的）	規範的（＆言語的）
関連事項	農村型コミュニティ 「共同性」 文化（個々のコミュニティに自足する個別的なもの）	都市型コミュニティ 「公共性」 文明（複数のコミュニティが出会うところに生成する普遍的なもの）
ソーシャル・キャピタル	結合型（bonding）（集団の内部における同質的な結びつき）	橋渡し型（bridging）（異なる集団感の異質な人の結びつき）

Wellman（2001）はサイバースペースとコミュニティの関係性における研究の中で、コミュニティを「社会性・支援・情報・所属感・社会的アイデンティティを供給する対人的結びつきのネットワーク」と定義している[14)]。こ

12）広井（2010）、18-19ページ。
13）広井（2010）、19ページを参考に、筆者作成。
14）Wellman（2001）, p.228.

の定義はネットワークとしてのコミュニティを提唱している。

2．MacIver（1924）におけるコミュニティ論

本節では、コミュニティ研究の代表的な地位にある、MacIver（1924）についてレビューしていく。コミュニティの概念を検討していく上で MacIver（1924）は重要な位置を占める。それはこれから述べていくように、「コミュニティ」と他の概念を併置し検討し、コミュニティに必要な要素について議論しているからである。それは実践共同体の概念を検討する上で大変有用である。

MacIver（1924）は社会や国家をとらえる基本的な単位としてコミュニティをとらえている。「生活存在が、相互に意志された関係に入るかそれを維持するところには、常に社会がある」[15] として、諸個人の類似の結果として生じる集団が社会の中に生じるとしている。その人々の類似と相違が結びつく上で、「共同的（communal）」と「結合的（associational）」という 2 つの類型が生じるとしている。これがのちに述べる「コミュニティ（community）」と「アソシエーション（association）」の 2 類型につながっている。その上で MacIver（1924）は社会を構築する上での法則について議論しているが、ここで重要なのは人間の意識的生活、意志と目的をもった生活が人間と他の有機体を分ける分岐点になっていることと、社会を構成する上での「裁可的」法則、すなわち「社会はこうあるべき」という社会的な義務の履行がなんらかの制裁によって課せられるという点である。それによって規律が発生するが、その制裁の根拠が慣習的なのか（コミュニティ）、目的とルールなのか（アソシエーション）によって異なるとしている[16]。

MacIver（1924）は社会の中に含まれる集団について、「コミュニティ」と「アソシエーション」という 2 つの概念を提示している。「コミュニティ」は「村とか町、あるいは地方や国とかもっと広い範囲の共同生活のいずれか

15）MacIver（1924：邦訳）、29ページ。
16）MacIver（1924：邦訳）、34-44ページ。

の領域」であるとしている。共同生活はさらに大きい領域から区別する上での境界がなんらかの意味を持つ独自の特徴をもっているとする。社会の中に「都市（市民）や民族や部族といったより集約的な共同生活の諸核を識別し、それらを＜すぐれて＞コミュニティとみなす」のである[17]。それに対してアソシエーションは、「社会的存在がある共同の関心（利害）または諸関心を追求するための組織体（あるいは＜組織される＞社会的存在の一団）」である。それは「共同目的にもとづいてつくられる確定した社会的統一体」[18]であるとする。われわれが常日頃使っている「組織（organization）」の概念は、この２つの類型でいえばアソシエーションに近いものであるといえよう。MacIver（1924）はこの２つの概念の対比を用いて、コミュニティの概念を精緻化している。

両者の違いは MacIver（1924）の中で折に触れて論じられている。その１つ１つをみていくことで、両概念を総合的に理解していくことが重要である。まず設立の意義については、「コミュニティは、社会生活の、つまり社会的存在の共同生活の焦点であるが、アソシエーションは、ある共同の関心または諸関心の追求のために明確に設立された社会生活の組織体である」としている。ここではその存在が「共同生活の焦点」と「組織体」という違いも指摘されている。次に「アソシエーションは部分的であり、コミュニティは統合的である。一つのアソシエーションの成員は、多くの他の違ったアソシエーションの成員になることが出来る。コミュニティ内には幾多のアソシエーションが存在し得るばかりでなく、敵対的なアソシエーションでさえ存在出来る」として、両者の関係を指摘している。ここでは実践共同体でいう「多重成員性（multimembership）」がコミュニティとアソシエーション、およびアソシエーション間で成り立つことがいわれている。そして「人はその（アソシエーションの）重要性が最低の目的にも、また最高の目的のためにも結合出来るものである。アソシエーションは、当事者にとって多大の意義あるものであ

17）MacIver（1924：邦訳）、46ページ。
18）MacIver（1924：邦訳）、46-47ページ。

ることも、大して意義がないものであることもある」として、その結成の目的が多岐にわたることを指摘している。他方で「コミュニティはどの最大のアソシエーションよりも広く自由なものである。それは、アソシエーションがそこから出現し、アソシエーションがそこに整序されるとしても、アソシエーションでは完全に充足されないもっと重大な共同生活なのである」としている。その目的の自由度と、アソシエーションのみでは充足できないものがあることを指摘している[19)]。

MacIver（1924）はアソシエーションの概念を精緻化するために、アソシエーションではないものと比較している。まずは「単なる集成（aggregation）はアソシエーションではない」としている。ここで MacIver（1924）は火事の群衆を例に出しているが、ただの見物のための群衆はアソシエーションではないが、消火活動という目的をもって集まったときはアソシエーションであるという。「この場合は短時間に成立し－また短時間のうちに消滅し去るわけである」としているが、アソシエーションにこの短期性は影響しないようである。しかしアソシエーションの目的を果たすために催された祝典に人が集まる場合を考えた上で、祝典が終わると人々は解散し、「そのために出来たアソシエーションも長続きし得ない」としている。MacIver（1924）は短期的なアソシエーションも概念的には存在するものの、あくまで概念の中に含まれるだけであり、中心的なものと考えてはいないようである[20)]。

続いて MacIver（1924）は、「法案の通過や教義の制定といった政治や宗教上の特定の改革実現のためにつくられた」アソシエーションを考えている。これは目的が成員を活性化し、成員の個性もあるが、目的が特殊かつ一時的であれば、その実現とともにアソシエーションは自然消滅するとしている。こちらのアソシエーションは継続的な目的実現活動がなされている間は継続するということである。

そして結婚によってできるアソシエーション、おそらく夫婦および家庭を

19）MacIver（1924：邦訳）、47ページ。
20）MacIver（1924：邦訳）、48-49ページ。

指すが、これについては「現前の世代と共に将来の世代も含み、それに入る人々の生活の完成とそこから生まれるものの生活を創始し発達させる」という深く永続的な目的があるとする。このアソシエーションは（離婚しない限り）永続的であることが特徴であるが、積極的なメンバーの増減はなされないと考えられる。つまり「より大きなアソシエーションには連続的な変化がある」のである[21)]。このように MacIver（1924）は持続的な目的をアソシエーションの必要条件とし、その目的の変化によってアソシエーションも変移するとしているのである。

コミュニティとアソシエーションの違いと同時に MacIver（1924）が考察しているのが国家（state）との違いである。MacIver（1924）の中心的な主張であるが、国家はアソシエーションの特殊な形態であるとする。目的が多岐にわたり、広い領域全体の住民を成員とし、服従を強制することもできる。国家の性質について論じることは本論文の趣旨ではないが、国家が排他的で確定的であることがコミュニティの包括的な性質とは異なることは指摘しておくべきであろう[22)]。「国家がコミュニティと等価ではなく、政治的アソシエーションは人間の全生活を包含しないし統制もできないということである。国家はコミュニティではなく、コミュニティ内の特に権威あるアソシエーションであると考えられる」という主張は、コミュニティがアソシエーションを超えた存在であることを示している。それと同時に実践共同体の位置づけにおいても示唆をもたらしている。

MacIver（1924）はコミュニティの概念を精緻化する上で、誤解されやすい他概念との区別をしている。まずは有機体とコミュニティの区別である。「有機体は単一の中心であり、生命の統一体であり、諸部分にはみられないもっぱら全体の目的ないしは意識であるか、もしくは―われわれの解釈しだいでは―それらを有している。ところがコミュニティは多数の生命と意識の中心から成るのであり、団体的統一のなかに埋没することなく、団体目的の

21）MacIver（1924：邦訳）、48-50ページ。
22）MacIver（1924：邦訳）、52-54ページ。

なかに自己の目的が見失われることもない、真に自律的個々人からなっている」[23] とし、個々人の自律性を明確にしている。コミュニティは有機体に類似しているがそのものではない。またコミュニティは有機的統一体でなく、精神的統一体であるが、１つの巨大な心・魂と考えてはならないと MacIver（1924）は述べている。「精神的統合には本来二つの形式があり、そのひとつは単一の心の分解し得ない本来の状態であり、他のひとつは社会的諸関係を結ぶ複数の心のコミュニティである。（中略）コミュニティは複数の心の連合体であるために、それ自体一個の心であることはない」[24] として区別している。そしてコミュニティを「個々人の総和」としてとらえることも、個々人を相互関係する存在として考えていないことから否定している。これらのことについて MacIver（1924）は、「すべてのコミュニティはコミュニティ成員に共通する類似性と、その成員に多様な差異との織りなした網である」[25] と表現している。コミュニティの特性を簡潔に言い表した表現である。

その上で MacIver（1924）は、コミュニティを考える上で重要な、「関心（interest）」と「意志（will）」の概念を導入する。すべての社会関係は心的諸関係であるとした上で、他のすべての関係との違いは、動機づけられる点、すなわち「われわれが互いの社会の中で関係し合うのは、自分自身や他人の目的を、または充足を、はっきりと、あるいはおぼろげに、予知して獲得しようとし、または本能的に獲得しようとする」ことであるとする。そして「その客観的側面である＜関心＞について、その関心のゆえにわれわれはコミュニティの諸関係を意志するのであり、またその主観的側面である＜意志＞に関しても、その能動的な心のために関心が存在するのである。人々がコミュニティを創り出すのは、相互に意志して関係を取り結ぶときである。しかしそのことは関心の故であり、関心のためなのである」として、関心と

23）MacIver（1924：邦訳）、97ページ。
24）MacIver（1924：邦訳）、101ページ。
25）MacIver（1924：邦訳）、110ページ。

意志がコミュニティを構築する原動力であり、なおかつ両者は相互に関係し合うことを指摘している[26]。ここにおいて MacIver（1924）は関心と欲求の違いについて言及している。すなわち「関心にはたえず欠乏感が先行して、その欠乏感を取り除きたい願望のために、関心が作り出されているとはいえない。（中略）生活とはたえず起る空腹感を満たす努力の連続であるという抽象的観念とは、われわれの具体的経験は矛盾している。（中略）しばしば行為の究極の動機は関心＜である＞。だがその背後において欠乏感の先行性を見出すことができないのである。（中略）関心を充足することは、その関心を失うことと同じではない」として、関心はいわゆる回避欲求とは異なることを指摘している。「人間の諸関心はすべての社会活動の源泉であり、その関心の変化は社会進化全体の源泉であると思われる」という MacIver（1924）の命題は、コミュニティが関心によって導かれるものであることをよく表している[27]。

そこから MacIver（1924）は関心概念の分類を試みている（図１）。

図１　MacIver（1924）による関心の分類[28]

- 関心
  - 共同的
    - 第一義的
    - 第二義的
  - 分立的
    - 類似的
      - 協調的
      - 併行的
      - 対立的
    - 補充的
    - 差異的

まず関心は、各人が自分の個別的個人的な充足のために追求する「分立関心」と、多数の人が追求する１つの包括的関心である「共同関心」に分類される。そしてコミュニティはこの「共同関心」に基づいて構築されるのである。その共同関心は、それ自身より上級の排他的である関心に依存しているアソシエーションの福祉や、コミュニティへの福祉への関心を第二義的共同

26）MacIver（1924：邦訳）、123-124ページ。
27）MacIver（1924：邦訳）、125-126ページ。
28）MacIver（1924：邦訳）、133ページを参考に、筆者作成。

関心と、より上級の関心に価値を置かない第一義的共同関心の２つに分けることができる。

分立関心はその関心の類似度と関連性によってさらに３つに分類することができる。複数の個人が型としては類似もしくは同一である関心を別々に追求しているとき、その関心は「類似関心」といわれる。それに対して型も違っている関心を別々に求めている場合は「差異的関心」であり、部分的に類似し部分的に異なる場合が「補充的関心」といわれる。類似関心と補充的関心は共同関心の発生につながりやすいとしている。さらに類似関心は、当事者たちが互いに全く接触しない場合の「併行的関心」、類似関心の追求によってその達成の程度に応じて他人の失敗を招く「対立的関心」、人々が各人、自分自身のために追求する多くの目的が協働によってさらに広がったり、全員の協働によって各人も容易に獲得できるようになるような場合の「協調的関心」の３つに分類され、類似関心は調和的か対立的のいずれかに向かい、その態度はある程度選択的であると MacIver（1924）は指摘している[29)]。

MacIver（1924）は共同関心と類似関心の違いについて説明している。類似関心は、「他のすべての人々がいわば生計とか富とかを求める場合の関心と、または各人にとって個々別々であるその他のどの関心とも＜型において＞類似ないしは同一の関心をそれぞれ追求する」ような関心を類似関心とした上で、「関心がどのように類似していようとも、類似関心をもとうとする存在の間には、こうした関心は何らのコミュニティも、社会関係のいかなるものも必然的に生ずるのではない」として、類似関心はコミュニティを必ずしも生み出すものではないと指摘している。そこでは動物が食物を探し求める関心が例としてあげられているが、人間も富を求めるという個別の関心は類似関心としても、そこから富を求めるコミュニティが発生することは必然ではないのである。それに対して共同関心は、「町とか国とか家族とかの福祉、名声、またはみんなが関係している企業の成功を得ようとする」よう

29）MacIver（1924：邦訳）、128-131ページ。

な関心を指すとする。そして「類似関心はすべて潜在的な共同関心である。その潜在性が実現されて（＝顕在化して）はじめてコミュニティは存在するのである」として、類似関心と共同関心の関連性を指摘している[30]。そしてMacIver（1924）はコミュニティとアソシエーションの関係性について、関心の概念を用いて説明している。「コミュニティとは、共同生活の相互行為を十分に保証するような共同関心が、その成員に認められているところの社会的統一体である」とした上で、「アソシエーションは固有の仕方でコミュニティの関心を追求するものであるから、コミュニティはコミュニティの関心を支えるために、アソシエーションを創出せねばならない」としている[31]。その関心と創出するアソシエーションとの関係については、表３のようにまとめている。

これらをもとにMacIver（1924）は、関心の類似性はそのまま個人・社会の葛藤および対立、あるいは調和の選択につながるとする。関心の類似性はそれ自体社会的対立の原因であるとともに、社会的調和の源泉であるのであり、コミュニティ内諸集団の共同関心は、分立関心に優っており、コミュニティの基礎になるのである[32]。

この関心をもとにしたコミュニティの議論は、実践共同体にとってもとても有効である。実践共同体はコミュニティとアソシエーション、双方の要素を持ち合わせていることが、この関心の議論からも明らかになる。

関心と意志について整理した上でMacIver（1924）は、コミュニティとアソシエーションの関係性についてさらに考察する。コミュニティを複数の意志の結合とした上で、それがなぜ凝集するのか、アソシエーションを創り出すもととなる多様な共同関心（または意志）がどのようにコミュニティのなかに整合されていくのかについて考えている[33]。そこにおいてMacIver（1924）が主張するのは、「コミュニティの生活は特殊なタイプの共同関心

30）MacIver（1924：邦訳）、128-132ページ。
31）MacIver（1924：邦訳）、133-141ページ。
32）MacIver（1924：邦訳）、142-151ページ。
33）MacIver（1924：邦訳）、152ページ。

表３　関心と創出するアソシエーション[34)]

関心	対応するアソシエーション
Ａ　一般的	
一般的（集団ないしコミュニティの）類似性に依存する社会性の関心	社交と友愛のアソシエーション、クラブ等
Ｂ　特殊的	
Ｉ　究極的	
(a)有機体的要求に基礎をおいた関心	
１．非性的なもの	農業、工業、商業のアソシエーション（これらはまたＩ(b)の関心に役立つ） 衛生上、医学上、外科上のアソシエーション 結婚と親族のアソシエーション、家族
２．性的なもの	
(b)心的要求に基礎をおいた関心	
文化関心 １．科学、哲学、教育	科学上、哲学上のアソシエーション、すなわち諸々の学校、大学
２．芸術、宗教	美術、音楽、文学のアソシエーション、すなわち劇場、教会
３．権力と威信への関心	排他的「社交」クラブ、すなわち軍国主義者、人種的民族的アソシエーション
（Ｂ－Ｉのすべての関心は、何程かの下図が、何程かの程度で組合わさり、関心の複合体、すなわち集団諸関心やコミュニティの諸関心を形成するであろう。単独にせよ、組合うにせよ、それら諸関心は派生的な特殊関心を創る。）	
Ⅱ．派生的、その主要類型 (a)経済的…財政上商業上のアソシエーション、銀行、合同会社、株式会社、労働組合、雇用組合等、またＢの下のほぼすべてのアソシエーション (b)政治的 (1)国家とその諸部分（コミュニティの諸関心に対応している） (2)政党（集団諸関心に対応している） (3)特殊関心を助長する政治的アソシエーション (4)(1)の諸部分に直接に依存しても、全面的に依存するのではない、法律上、司法上などの全アソシエーション	

34）MacIver（1924：邦訳）、140ページを参考に、筆者作成。

に応えるアソシエーションの、それら鋳型の中に閉じ込められない」ということである。「コミュニティの生活はアソシエーションの諸形式を包含しており、いわばアソシエーションの骨格に、生きた血と骨をまとわせるようなものである」として、その包摂的な性質を指摘している。また意志の概念を用いて、「コミュニティは意志と意志の間の無数の関係の全体系であるが、アソシエーションは＜あらかじめ意思された＞（pre-willed）形態であり、そのもとでは、明確に限定された種類の意志関係を整えるのである」として、意志の相違点を明確にしている。この「どのアソシエーションも、コミュニティ内の一組織であるとともに、＜コミュニティの一器官＞である」という主張は MacIver（1924）の主張の根幹であるといえる[35)]。

コミュニティの概念について探究したところで MacIver（1924）は、そのコミュニティをどのように発達させるのかという点に論を移す。MacIver（1924）はコミュニティの発達を成員の共同生活を通じた心的発達であるとし、それは意図的な人間の活動を通じて達成されるとする。この意図的な人間の活動を実践と置き換えてもよいであろう。その上でコミュニティ発達の基準を、次のように整理している[36)]。

Ⅰ(1)　パーソナリティとその基盤としての生活と健康への配慮
　(2)　専制的支配を行う存在、強制力の行使の形態と程度
　(3)　成員の多様性と、それに相応した慣習の占める比重
Ⅱ(1)　成員各自とコミュニティ全体の自律的に決められる関係の単純・複雑さ
　(2)　コミュニティ内アソシエーションの数
　(3)　成員の所属する最大のコミュニティの大きさと社会生活が包摂される境界の広さ

35）MacIver（1924：邦訳）、152-154ページ。
36）MacIver（1924：邦訳）、191-208ページ。

この基準をみると、成員の自律性と多様性、アソシエーションとの関連性、そして包摂性が強調されていることがわかる。発達に対して停滞（統制の下で発達が阻害される）、退化（発達段階の初期に復帰する）、反動（発達段階の初期に復帰しようとする動き）、頽廃（生活の挫折や弛緩により発達段階の初期に復帰する）といったような現象もみられるとする。

これらをふまえて MacIver（1924）は、コミュニティ発達の基本法則を掲げる。まず「社会化と個性化は、単一過程の二つの側面である」というものである。この２つの概念について MacIver（1924）は、個性化を「より自律的存在に、すなわち彼自身には固有の価値や真価が有るものとして、承認し承認される、自己指導的で、自己決定的な、一段と独自なパーソナリティになること」とし、社会化を「人間が社会に一層深く根を張る過程、つまり人間の社会的諸関係がより複雑かつ広範囲になる過程、人間が仲間との関係を増大させ、発達させることにおいて、またそのことを通じて彼の生活の実現を見出だす過程」と定義している。そこから先ほどの法則を、「社会性と個性は、社会化と個性化の過程に対応する特質をもっているので、＜社会性と個性は同一歩調で発達するものである＞」というようにいうこともできるとしている。またこのコミュニティ発達の２つの方向性は、コミュニティ成員のパーソナリティ発達の２つの方向性でもある。そのように考えるとこの法則は、＜パーソナリティが、各自にそしてすべての者に、発達するにつれ、個性と社会性の二重の発達を示す＞という表現になるとする[37)]。MacIver（1924）は、成員のパーソナリティの発達によって、非個性的な社会的関心が、個性化された社会的関心に変えられるとする。関心にアイデンティティの側面が加味されるといってよいであろう。それにともなってコミュニティが複雑に分化していく。つまり「コミュニティの分化は、社会的諸個人におけるパーソナリティの成長に相関している」のである。MacIver（1924）が重要視するのは、「個性の要求と社会性の要求は、結局二つのものではなく

37）MacIver（1924：邦訳）、242-247ページ。

て、ひとつのものである」という点にある。個性とそれが求める自律性は社会の中でこそ意味を持つものであり、成員の両者の追求がコミュニティ発達をもたらすのである。またコミュニティの分化はそれ自体、コミュニティの衰退を意味するものでもない。MacIver（1924）はコミュニティ内のアソシエーションは固有の性質をもち、それらが特有の利害に専念しようとするほど、コミュニティに向けるサービスが向上するとしている。企業が競争と差別化により多種多様な製品を社会にもたらすことを考えれば容易に理解できよう。そしてアソシエーションの大小、そしてコミュニティの大小のさまざまな関係が、人々に便益をもたらす。コミュニティやアソシエーションが連合体を作ったり、大きなコミュニティやアソシエーションが小さいそれらを包含したり、逆に小さいそれらが大きなそれらを補ったりするのである[38]。これらの関係性は実践共同体の考えにもいかされるものである。

次に MacIver（1924）が提唱するのは、関心を通じたコミュニティ発達の方法についてである。つまり「コミュニティの発達は、徐々に形態変化を遂げつつある対立的および併行的類似関心を第二義的な共同関心の成立を通じて協調的類似関心に仕立て変える」というものである。その方式としては、

A　＜直接的敵対方式＞（関心は対立的で共同関心はない）
B　＜孤立方式＞（関心は併行的で共同関心はない）
C　＜競争方式＞ ⒜ ＜純 粋 競 争＞（特殊の関心は対立的で、広範な関心は共通）
　　⒝ ＜限定的競争＞（特殊の関心の一部は対立的で一部は協調的、広範な関心は共通）
D　＜協調方式＞ ⒜ ＜部分的協働＞（特殊の関心は相互補完的、したがって部分的共同関心は共通）
　　⒝ ＜全面的協働＞（特殊の関心は共通）

38）MacIver（1924：邦訳）、247-272ページ。

というものがある。このうちCの競争方式と、Dの協調方式が類似関心を生み出すのに有効な手段となる。競争や協調によって関心が対立しなくなり、類似関心が成立することによってコミュニティの発展の源泉である協調的な類似関心が生み出されるということになる。そして MacIver（1924）は、このような関心の発達が各種のアソシエーションを生み出し、それらのもたらす経済的な発展が、コミュニティの発達を促すとしているのである[39)]。

MacIver（1924）のコミュニティ論は、コミュニティとアソシエーションという２類型をもとに、関心の概念を導入することで、コミュニティに必要な要素を明らかにしている。そしてその発達について成員の個性化と社会化の２つの方向性があり、その追求がコミュニティに多様性をもたらし、なおかつ多様なコミュニティやアソシエーションが相互補完や包摂をおこなうことで人々の関心や生活が多様な形で形成されること、類似関心の発達がコミュニティ発達の源泉としてみられることなどを明らかにしている。これらの議論は実践共同体の議論にとって大変重要である。特に実践共同体は MacIver（1924）の指摘するコミュニティでもなければアソシエーションでもない、中間概念と考えられる。議論を整理する上で有効な道具立てを提供しているのである。

３．コミュニティ概念の検討

もちろんコミュニティの概念について考察している研究は MacIver（1924）だけではない。本論文では構成上、MacIver（1924）の研究を先にとりあげたが、それと前後する形で多様なコミュニティ概念を議論した研究が生まれている。以下ではそれらの代表的な研究を順次取り上げて考察する。

⑴ コミュニティ概念の変遷

コミュニティについて理解を深めることは重要であるが、コミュニティ研

39）MacIver（1924：邦訳）、361-398ページ。

究について精緻にレビューしていくことは本論文の主旨とは異なる。本論文の主旨は実践共同体概念をよりよく理解することである。したがってコミュニティ概念の変遷については Delanty（2003）の枠組みを用いて理解することにする。

Delanty（2003）はコミュニティ研究の変遷をレビューによって整理している。彼はコミュニティは19世紀における興隆、20世紀における衰退・そして21世紀における再生という３つの時期を経ているとしている。その上でコミュニティの議論には４つのアプローチが存在するとしている。第１のアプローチはコミュニティと都市・社会を対立するものとみなした上で、都市部が引き起こす不利益に対してコミュニティを再生することで対応しようとするものである。この視点におけるコミュニティは相当程度空間化されており、都市・社会の支援を必要とするとしている。伝統的なコミュニティ研究や都市社会学研究が代表的な研究である。第２のアプローチは帰属に向けた探求と考えられ、アイデンティティという文化的な問題に重点が置かれているものである。このアプローチは自己対他者としてのコミュニティとして描かれており、文化社会学と文化人類学研究が代表的な研究である。第３のアプローチは政治意識と集合行為という観点からコミュニティをとらえるもので、政治学研究が背景にある。不公正に対する集合的な「我々」としてのコミュニティを考えている。そして第４のアプローチはグローバル化、情報技術の進展に伴う新たな近接性・距離関係の中で構成されるコミュニティである[40)]。

Delanty（2003）はコミュニティはもともと社会・都市と対立するような概念ではなく、社会のエッセンスを表すものであったとしている。そしてコミュニティの両義性、すなわち地域性と個別性（直接的な社会関係の領域である親密性や近接性）に対する、すべての人類が参加する普遍性というものは、常にコミュニティ理念の中心を成してきたと主張する。「コミュニティは、排他的でもあれば包摂的でもありうる」という命題は、コミュニティ概

40）Delanty（2003：邦訳）、4-8ページ。

念を理解する上で重要である[41]。そして近代化にともなうコミュニティの衰退によって、規範的な理想としてのコミュニティ概念が３つ登場しているとDelanty（2003）は述べている。それは⑴回復不能なものとしてのコミュニティ、⑵回復可能なものとしてのコミュニティ、⑶今後達成されるものとしてのコミュニティ、の３つである[42]。この研究の流れは、近代社会において伝統的・規範的なコミュニティの実現（あるいは脱却）という研究、都市とコミュニティの対立と融合、および地域性や空間性から離れた社会関係という「象徴的コミュニティ」の研究へとつながっていく。

政治や文化との不分離性を指摘したのちにDelanty（2003）が扱うのは、「コミュニケーション・コミュニティ」というコミュニティの対話性である。これはコミュニティのよりラディカルな側面に焦点を当てているものであり、抵抗や社会運動と結びついている。伝統的なコミュニティの考え方を批判し、またその限界を指摘した上で、異なる社会のあり方を提唱し異議申し立てを行うことが求められている[43]。その立脚点は差し置いても、コミュニケーションによるアイデンティティ構築という側面は現代コミュニティにとって重要な視点であるといえる。

ポストモダン・コミュニティの研究においては、コミュニティは遊牧的で、移動性が高く、情緒的で、対話的である。そして制度的あるいは空間的構造の形で明確に定義されないものであるとされる。それは具体的な形を取らず、経験されるものとしてしかあり得ないからである。コミュニティは「操作不能」なものであり、決して道具化したり、制度化したりできないものであるとされる[44]。ポストモダン的な考え方は実践共同体研究にも影響を与えているが、そのあり方には議論が必要であるといえよう。そしてDelanty（2003）は、現代社会においてはグローバル化にともなうコスモポリタン・コミュニティの出現、および情報技術の進展にともなうヴァーチャル・コミュニティ

41）Delanty（2003：邦訳）、12-18ページ。
42）Delanty（2003：邦訳）、28-30ページ。
43）Delanty（2003：邦訳）、154-155ページ。
44）Delanty（2003：邦訳）、182-190ページ。

といった、多様な形のコミュニティが形成されてきているとしている。

Delanty（2003）によるコミュニティ概念変遷の整理からは、コミュニティが地域性と個別性が所与の条件であった時代から、近代化と都市社会の出現による衰退と再生への取り組み、政治や文化との融合、社会運動による異議申し立てというコミュニケーションと帰属によるアイデンティティへの注目、ポストモダン化による道具化や制度化の拒否、そしてグローバル化や情報社会化の影響を受けたコスモポリタン化・ヴァーチャル化といった形で、常に変遷を繰り返してきたことがわかる。しかしコミュニティが一度衰退しつつも近年は再生の機運が盛んであるように、実践共同体についてもコミュニティの変遷を踏まえて考えることは重要である。

⑵　Tönnies（1935）のゲマインシャフト（Gemeinschaft）とゲゼルシャフト（Gesellschaft）

Tönnies（1935）は、ゲマインシャフト（Gemeinschaft）とゲゼルシャフト（Gesellschaft）の概念を提示している。コミュニティ概念とは異なるが、コミュニティの議論の中では取り上げられることが多い。両者はともに肯定的な関係によって形成される集団であるが、その形成過程では人々の意志が関連している[45]。ゲマインシャフトは本来的あるいは自然的状態としての人々の意志（本質的意志）によって形成される集団、自然的統一体である。代表的なものは母子関係、夫婦関係、きょうだいなどの血縁関係（血のゲマインシャフト）である。そこから共同居住を基礎とする近隣や地域の人たちという場所のゲマインシャフト、目的や意図を等しくする共同作業、共同管理を行う精神のゲマインシャフトに発展し分化するという[46]。それに対してゲゼルシャフトは本質的には分離している人々が、何かの目的のために選択的意志に従って結合しようとする集団である。都市や企業がその代表例である[47]。

45）Tönnies（1935：邦訳）、34-40ページ。
46）Tönnies（1935：邦訳）、41-62ページ。
47）Tönnies（1935：邦訳）、91-102ページ。

そして社会の発展とともに、基本的にはゲマインシャフトからゲゼルシャフトに移行するものであるといわれている。

Tönnies（1935）のゲマインシャフトとゲゼルシャフトの概念について、Delanty（2003）は両概念が簡単に「コミュニティ」と「社会」という言葉に置き換えられるものではないとしている。両者は異なる種類の社交生活を指しており[48]、現在のコミュニティ概念とは結びつきを失っているとする[49]。両概念はどちらともコミュニティ全体を指すものでも、実践共同体を指すものでもないが、意志に基づく関係性という分類軸は重要であると考えられる。

⑶ Park and Burgess（1921）の社会とコミュニティ

Park and Burgess（1921）は社会（society）の概念との対比で、コミュニティについて考察している。Park and Burgess（1921）は社会について、「習慣、情緒、生活様式、習俗、技術と文化の社会的遺産であり、集合的な人間行動に付随的で必要なものである」と定義している。そしてそれらはコミュニケーションによって創造され普及されるものであり、それによって達成される世代間への伝承が社会の継続性を決定する。彼らはコミュニケーションを社会における不可欠な概念としてとらえ、コミュニケーションのあるところに社会があるとしている[50]。

それに対してコミュニティは個人や制度の地理的な分散であり、全てのコミュニティは社会であるといえるが、すべての社会はコミュニティであるといえないと、Park and Burgess（1921）は指摘している。コミュニティが地理的分散であれば、世界というコミュニティは国や地域などの集まりと考えられる。また個人はたくさんの社会集団に所属するが、複数のコミュニティに所属するとはいえない（小さなコミュニティを大きなコミュニティが包摂している場合以外）としている。彼らはコミュニティを包摂的な概念である

48）Delanty（2003：邦訳）、45-47ページ。
49）Delanty（2003：邦訳）、213ページ。
50）Park and Burgess（1921），pp.161-163.

と考えている。そして社会学的な観点からみると、個人がコミュニティのメンバーであるのはそこに生きているというよりは、コミュニティの日常生活に参加しているからこそであるとしている[51]。たんに地理的なものだけではなく、そこにおける営みへの参加、実践こそがコミュニティのメンバーであることを決めるという考え方は、実践共同体に通じるものである。また Park and Burgess（1921）がコミュニティの原理としてあげているのが共生（symbiosis）である。多種多様な種が共に生きる社会的共生（social symbiosis）は、コミュニティの存在する上で重要な要素であるといえる[52]。

そして Park and Burgess（1921）は、社会における人々の組織化された習慣、情緒、態度は「同意（consensus）」としてまとめることができるとしている。この同意という概念は、社会とコミュニティを分ける上で重要である。たとえば集団のメンバーの同意には３つの側面、すなわち団結精神（esprit de corps）、モラール（morale）、集団表象（collective representations：集団活動を象徴するもの）があるとしている。彼らは植物群落（plant community）をコミュニティであって社会ではないもののメタファーとして活用している。個別の植物が地理的に組織化されているが、そこには同意がないとしているのである。Park and Burgess（1921）は、競争、分離、適合といった生存のための努力は社会に不可欠であるが、社会においてはそれらの実践は、同意によってある程度制約されるとしている。それが競争的協調（competitive co-operation）につながるのである[53]。Park and Burgess（1921）の社会とコミュニティの違いは、コミュニティが共生という原理に基づく地理的な分散であること、社会との違いはコミュニケーションと同意の存在であることを指摘している。

51）Park and Burgess（1921），pp.162-164.
52）Park and Burgess（1921），pp.169-171.
53）Park and Burgess（1921），163-167.

(4) MacIver and Page（1949）の地域性とコミュニティ感情

MacIver and Page（1949）は、先の MacIver（1924）の議論を受け継ぎ、コミュニティについて、大小にかかわらず集団の成員が、特殊な関心ではなく、日常生活の基礎条件を共有する形で生活するとき、その集団はコミュニティであるとしている。また近代のコミュニティは決して自己充足的である必要はないことも付け加えている[54]。

加えて MacIver and Page（1949）がコミュニティの基礎としてあげているのが地域性（locality）とコミュニティ感情（community sentiment）である。地域性については基本的にコミュニティは一定の領域を占めているものであり、地域性という結束の強い結びつきの条件によって安定しまた影響を受けるとしている。コミュニティという概念の重要性は社会的結合力と地理的領域の間の関係によって大いに強調されるとしているのである[55]。コミュニティ感情は地域の中で一緒に共同生活をしているという意識・感覚であり、例えば都市でたんに隣人として生活しているというのはコミュニティではないとしている[56]。

このコミュニティ感情について MacIver and Page（1949）はさらに考察している。コミュニティ感情は社会化、教育のプロセスによっても構築されるが、それは３つの構成要素によって考えることができるとする。１つめは「われわれ感覚（we-feeling）」である。交わりや集合的参加の感覚であり、他者と共にいる「われわれ（we）」というアイデンティティをもたらす。共通の関心や集合生活によってもたらされ、批判されたり脅威を感じたりするときにも感じるとされる。２つめは「役割感覚（role-feeling）」である。これはやるべき役割がある、あるいは社会において相互交換を果たす機能があるという感覚であり、全体の中で個人の一部としての従属を含み、日々の生活規律の中での訓練や習慣化によって形成される。３つめは「依存感覚

54）MacIver and Page（1949），p.8-9.
55）MacIver and Page（1949），p.9.
56）MacIver and Page（1949），p.10.

(dependency-feeling)」である。役割感覚に近い個人の感覚で、生活に必要な条件としてコミュニティに依存する感覚である。これは物質的な欲求を満たすために他者に依存する物理的なものと、「家」として個人を支えてくれる心理的なものの２つが存在する。この３つの要素は互いに関連し合っている[57]。船津・浅川（2014）はこの３つに加えて、コミュニティ自体の認識である「コミュニティ認識」を合わせて、「コミュニティ意識」の概念を表４のように説明している。

表４　コミュニティ意識の４つの要素[58]

コミュニティ意識	コミュニティ認識：コミュニティ・コグニション
	コミュニティ感情（特にわれわれ感情）：コミュニティ・アタッチメント
	役割感情：コミュニティ・コミットメント
	依存感情：コミュニティ・アイデンティティ

⑸　Turner（1969）のリミナリティとコムニタス

Turner（1969）はアフリカ部族の宗教儀礼について詳細なフィールドワークを実施し、その中でコミュニティについて興味深い知見を引き出している。Turner（1969）が強調するのは、コミュニティはリミナリティ（liminality：境界性）において生じるということである。Turner（1969）は「リミナリティの、あるいは、境界にある人間（“敷居の上の人たち”）の属性は、例外なく、あいまいである。このあり方やこの人たちは、平常ならば状態や地位を文化的空間に設定する分類の網の目から脱け出したり、あるいは、そこからはみ出しているからだ。境界にある人たちはこちらにもいないしそちらにもいない」[59] として、境界にある人たちを社会構造に組み込むことが必要で、

57）MacIver and Page（1949），p.291-293.
58）船津・浅川（2014）、136-138ページを参考に、筆者作成。
59）Turner（1969：邦訳）、126ページ。傍点やフリガナは省略。

そのための儀式がいわゆる「通過儀礼」となるとしている。そして Turner（1969）は、そのような境界で起こる儀礼、すなわち通常の社会構造にいる人々と境界にいる人々が混じり合って儀礼を行う場を、「“共通の生活の場”とは区別するために“共同体”という語よりもラテン語のコムニタス(communitas)」を使うことにする」[60] として、コムニタスの概念を提唱している。そして Turner（1969）は個人や生活にとって社会生活がコムニタスと社会構造を連続的に経験することを含む弁証法的過程であり、社会構造とコムニタス、状態と移行を交互に経験することであるとしている[61]。

Turner（1969）のコムニタス概念の特徴は、伝統的コミュニティ論に存在するような地理的な条件から離れていることである。「私はコムニタスに特定の地域的設定を加えようとする考え方を努めて避けてきた。地域的設定は多くの（コミュニティの）定義に広くみられるが、その性質上、しばしば限定を加えるものであるからだ。私にとってはコムニタスは社会構造が存在しないところに出現するものである」と Turner（1969）は述べている[62]。地理的条件からコミュニティが脱することができた契機の研究であるといえる。また Turner（1969）は、コムニタスの共通の特徴として、⑴社会構造の裂け目にある、⑵その周辺にある、⑶その底辺を占める、人間であり原理である、をあげ、また「コムニタスは、境界性（＝リミナリティ）において社会構造の裂け目を通って割り込み、周辺性において構造の先端部に入り、劣位性において構造の下から押し入ってくる」としている[63]。コムニタスは既存の社会構造に対して対立的な位置づけにあり、時には（象徴的な意味で）逆転させるものであるとしているのである。実践共同体に儀礼的な意味合いはみられないといってよいが、地理的条件が含まれないのはコムニタスと共通しているし、リミナリティや社会構造との対比的な位置づけは、Brown and Duguid（1991）の規範的・非規範的視点の考え方、および境界を越える

60）Turner（1969：邦訳）、128ページ。傍点やフリガナは省略。
61）Turner（1969：邦訳）、125-130ページ。
62）Turner（1969：邦訳）、173ページ。
63）Turner（1969：邦訳）、171-179ページ。傍点やフリガナは省略。

学習（たとえば Engeström, 2008；香川・青山、2015）の考え方にも結びつく、貴重な示唆を与えているといえよう。

また Cohen（1985）は Turner（1969）の考え方をさらに発展させ、コミュニティが関係性の中で立ち現れる存在であるとした。彼はコミュニティの定義について、「①何かを共有しており、②他の一段と想定された人びとと一線を画している」ことから、コミュニティは類似と差異を同時に表す、関係性を表す概念であるとした。その上でコミュニティの境界に焦点を合わせる利点について、境界がコミュニティのアイデンティティを区切っていて、個人のアイデンティティと同様に、社会的相互行為の要件がそれを必要としているからであるとしている[64]。Cohen（1985）は社会構造の中でのコミュニティを構造的にとらえる立場を批判し、コミュニティの象徴的な見方を提唱している。その上で Cohen（1985）は、コミュニティが人が社会的であるための方法を学び実践し続ける場所、文化を獲得する場所であるとする[65]。この点は Lave and Wenger（1991）から続く実践共同体の考え方と軌を一にする。しかし Cohen（1985）は同時に、同じ事象や考え方を見たとしても人々にとってはシンボルから同様の意味を引き出すとは限らず、コミュニティ内外の人々では意味が異なること、人々の体験におけるコミュニティのリアリティは、共通の一連のシンボルに対する愛着や関わり方に内在するとしている[66]。コミュニティの象徴的な視点は実践共同体概念につながる部分も多いが、構造的な視点とのバランスは十分に配慮した方がよいと考えられる。

⑹　Soja（1996）の「第三空間」と空間性の議論

ポストモダン的な考え方では、コミュニティは象徴的・流動的なものとして捉えられ、伝統的なコミュニティ論における地理性は捨象されている。しかし別の観点から、コミュニティの「空間性」に注目する研究もある。たと

64）Cohen（1985：邦訳）、1-4ページ。
65）Cohen（1985：邦訳）、9ページ。
66）Cohen（1985：邦訳）、11ページ。

えば Sennett（1998）は、資本主義の進展が労働者に与える影響を考察していく中で、労働者のコミュニティがそれに対抗するものであることを主張している。Sennett（1998）は企業経営のフレキシブル化、ショートターム化は、組織の非連続的見直し、フレキシブル生産方式、中央集権なき権限集中という現象を進展させるとし、それは労働現場の信頼や絆を低下させ、労働者をリスクテイク的行動に駆り立て、長期的なキャリアを構築することを阻害するとしている。そして Sennett（1998）は、失業者のコミュニティの事例から、新資本主義のもたらすさまざまな問題に対抗するための「場所」の力を指摘している。それは企業の立地的側面と、労働者のコミュニティ的側面である。外部世界に対する相互依存に基づいた「われわれ」という感覚をもって、信頼に基づくコミュニティを形成することの重要性を示している[67]。それは企業経営と労働者の関係において、同じ境遇を共有するコミュニティ成員の地域的つながりを重視する考え方である。

Soja（1996）は空間性にかんする議論の中で、「第三空間（thirdspace）」の概念を提唱している。Soja（1996）は第三空間を、「『現実』の物質的な世界に焦点を合わせる≪第一空間≫の視角、そして『想像上』の空間性の表彰を通じてこの現実性を解釈する≪第二空間≫の視角とに基礎をおいている」とし、「現実−かつ−想像上の場所」であるとしている[68]。Soja（1996）は「第三空間」のアイディアの創出において、「≪他者化≫としての三項化」という批判的な戦略を用いている。それは「あらゆる二項対立、思考と政治活動をわずか二つの選択肢に限定するすべての試みに対して、もうひとつの＝他なる an-Other 選択の組み合わせを差し挟むことで応答しようとするもの」である[69]。Soja（1996）は既存研究の多くが「第一空間」もしくは「第二空間」の視角からの分析になってしまっているとしているが、その両者の境界にある「第三空間」について Soja（1996）は、あえて明確な定義を行って

67）Sennett（1998：邦訳）、195-211ページ。
68）Soja（1996：邦訳）、13-14ページ。
69）Soja（1996：邦訳）、13ページ。

いない。それは「≪第三空間≫を権威的なプロトコルによって制限し厳密に枠付けるよりも、むしろ開放的・包括的な状態にとどめておきたいから」[70]であるが、その特徴を整理することはできる。まずはその実践性である。「≪第一空間≫が主としてその読解可能なテクストとコンテクストを通じて探究され、また≪第二空間≫がその卓越した表彰的言説を通じて探究されるのであれば、≪第三空間≫の探究はさらに潜在的に開放的な実践の特定の形態、すなわち何とかして世界を良くしようという意識的な―そして意識的に空間的な―努力において知識を行動へと転換することで導かれなければならない」ものであるとしている[71]。第一空間・第二空間の（境界的な）実践が第三空間の基盤となる。２つめはその空間性である。Soja（1996）は「あらゆる社会諸関係が現実・具体―わたしたちの生きられる社会的実存の一部―になるのは、それらが社会空間の社会的生産に空間的に『刻みこまれる』―要するに、具体的に表象される―時に限られる、ということだ。（中略）非空間化された社会的現実などありはしない」[72] としている。Soja（1996）は第三空間の空間性を主張することで現実性を担保しているといえよう。しかし第一空間との差異はその表象性にあるともいえる。「≪第三空間≫とは、どの角度からも見ることができ、どこから見ても明瞭な、すべての場所が存在する空間である。（中略）すべてが≪第三空間≫に集まる」[73] としている所以はそこにあり、境界の備える両義性が特徴であるといえる。Soja（1996）は第三空間について Lefebvre（1974）の主張を引用し、「知覚される空間」「施行される空間」「生きられる空間」の３次元によって規定されるとしている[74]。それは先述の空間性・表象性・実践性に対応しているといえる。

そしてもう１つの特徴はラディカルな開放性である。「≪第三空間≫は、把握され実践されるべき解釈的な洞察と戦略的な力に対して、ラディカルな

70）Soja（1996：邦訳）、207ページ。
71）Soja（1996：邦訳）、33ページ。
72）Soja（1996：邦訳）、57ページ。傍点省略。
73）Soja（1996：邦訳）、76ページ。傍点省略。
74）Soja（1996：邦訳）、86-96ページ。

開放性（そしてもちろん、開放的なラディカル）を常に保っていなければならない」[75] としている。Soja（1996）では様々な事例が引用されているが、この点をよく示しているのは Hooks（1990）の事例をもとにした「周縁性を選び取る」という行為である。Hooks（1990）ではアメリカ黒人女性のアイデンティティが、白人－黒人、男性－女性、そして中心－周縁といった二項対立から脱し、ラディカルな黒人の主体性として獲得されるが、Soja（1996）は「彼女が選び取るのは、中心的であると同時に周縁的な（また同時にどちらでもない）空間である。すなわち、それは矛盾やあいまいさ、そして危難、けれども新しい可能性―政治的選択の≪第三空間≫―で満たされた、縁にある困難でリスクの高い場所である」としている。実践をもとにしたこの開放性こそが第三空間の特徴であるといえる。

Soja（1996）の第三空間の概念は実践共同体の「学習の第三の場所」としての考え方に通底する。空間性・表象性・実践性という３次元も実践共同体を特徴付けるものであるといえるし、実践によって形成される開放性も、松本（2015）で明らかにした「複眼的学習」の結果であると考えることもできよう。Sennett（1998）の主張する空間性への意識も含めて、実践共同体の特質を考える上で重要である。

⑺ Maffesoli（1988, 1993）の感情的共同体

Delanty（2003）の整理したポストモダン・コミュニティの特徴、すなわちコミュニティは遊牧的で、移動性が高く、情緒的で、対話的であること、制度的あるいは空間的構造の形で明確に定義されない、経験されるものとしてあること、などを明確に表しているのが Maffesoli（1988, 1993）の研究である。そこにおいては、個人は大衆と、情緒的部族との間を行き来する存在であるとされる（図２）。

75）Soja（1996：邦訳）、138ページ。

図２　大衆と部族的共同体間の人々の移動と緊張[76]

機械的構造　　（文化的、生
経済的－政治的組織 ⟷ 個人（機能）⟷ 契約による集団化　↑　産的、信仰的、
……（対）……　性的、イデオ
対複雑あるいは有機的構造（ポスト・モダン）　↓　ロギー的諸領
大衆 ⟷ 個人（役割）⟷ 情緒的部族　域）

Maffesoli（1988）においては、個人主義の限界を超えると思われる社会的諸形態を分析することが目的とされる。社会における都市化や大衆化の進展、それと同時に模倣と順応主義によりたんなる個人主義も衰退し、人々は一時的な感情移入に基づいた社会性による、不安定で開かれた共同体、「感情的共同体」あるいは「部族」を逐次的に構築するとMaffesoli（1988）は指摘する。「小集団性（部族性）と大衆化は並行して進む」のである[77]。しかしMaffesoli（1993）においては必ずしもこの状態は否定的な意味のみをもっているわけではない。特に芸術面・美学面における真の大衆的主体性は情動的感染、感情の共有、共通の感動への参入に基づく、部族的共同体が担うと主張しているのである[78]。情動的その原動力となるのは伝統的コミュニティ論における安心や承認ではなく、まず美的感覚などの雰囲気や感情、情緒によるものである。それが多様な要素をまとめるセメントになり得る。次にMaffesoli（1988）が「習慣」と呼ぶものである。そこでは習慣を「ある社会的集合体が、それが現にあるようなものとして自らを認識することを可能にする共通の仕来たりの全部」であるとし、言語化されたりはしないものの人々を結びつける力であるとしている[79]。それに加えて「秘密の掟」、すなわち秘密の共有も感情的共同体の凝集性を高める要素として無視できないとしている。Maffesoli（1988）は秘密結社を例にあげているが、「人々がマスク（仮面）をして進めば進むだけ、それだけ一層人々は共同体的繋がりを強化

76）Maffesoli（1988：邦訳）、11ページを三項に、筆者作成。
77）Maffesoli（1988：邦訳）、166ページ。
78）Maffesoli（1993：邦訳）、3-7、157-158ページ。
79）Maffesoli（1988：邦訳）、38ページ。

するのである」という記述は、コミュニティの閉鎖的性質をよく表している[80]。そしてもう１つは「近接性」である。これは例にあげられている公共空間や、後述する Oldenberg（1988）の「サードプレイス」的な空間のように、空間的・地理的なものだけでなく、状況的、契機的、表象的な意味でも用いられ、それが多様な人々の交錯を生み出すとしている。

そして Maffesoli（1988）は、人々は大衆と小集団（部族）の間には絶えざる往復運動があると指摘している。部族的性格を持つ情緒的共同体は伝統的なコミュニティ論における地域性もないため、「大衆が永遠の蝟集状態にあるのとまったく同じように、その状態で結晶化する部族は安定的なものではなく、それらの部族を構成する人々も部族から部族へと動き回る」とされる[81]。人々は一時的・適時的な感情移入によって部族的結集と逃散を繰り返すと指摘しているのである。そしてその頻繁な移動と近接性は、部族的共同体間のネットワークを構築する。「小集団（部族）は、帰属の感情から出発し、ある個別的な倫理（部族の雰囲気や情緒）との関係から、コミュニケーションのネットワークの枠内で成立してゆく」と Maffesoli（1988）は述べている[82]。このポストモダン的コミュニティ論は、最大限の開放性と自由さを表している。コミュニティと実践共同体の違いの１つはこの開放性でもあるが、実践共同体は集散を繰り返す存在ではない。学習という実践があるからこそ実践共同体はその形を構築・維持できるのである。

⑻ 鈴木ほか（1978）のコミュニティ意識

鈴木ほか（1978）はコミュニティの変容をコミュニティ意識、すなわち一定地域に居住する生活者群が、当該地域における社会生活状態の共同性についてもつ意識の変容という観点から捉えている。コミュニティ意識の原型は相互主義とローカリズム（地域的特殊主義）の複合である「地域的相互主義」

80）Maffesoli（1988：邦訳）、166-177ページ。
81）Maffesoli（1988：邦訳）、11ページ。
82）Maffesoli（1988：邦訳）、241ページ（傍点省略、括弧内筆者）。

であり、そこから共同社会性の崩壊、自己中心主義の露呈による「地域的利己主義」への変容、都市化と産業化に伴うローカリズムからコスモポリタニズムへの移行と地域産業への依存から個別労働への移行による「開放的利己主義」への変容、そしてローカリズムから開放的態度への移行と市民意識の高まりによる「開放的相互主義」への変容という３つの変容形態が考えられるとする[83]。その上で鈴木ほか（1978）は、コミュニティ意識にはその量と質、水準と方向とを区別しなければならないとして、「コミュニティ・モラール」と「コミュニティ・ノルム」の概念を提唱している。まずコミュニティ・モラールとはコミュニティへの相互主義的な参加意欲・参加意識を表しており、３つの要素群によって構成されている。１つは地域の共同生活状態についてもつ情報と関心という認知的要素である。２つめは地域の共同生活状態に対する満足感、すなわち受益感および同一化などの感情的要素である。３つめは地域の共同生活状態にたいする総合評価と主体的関与の構え、いわば自主的参加を規定する意志的要素である。コミュニティ・モラールは認知・感情・意志の３つの要素のなんらかの関連において形成されるとする。それに対してコミュニティ・ノルムはコミュニティに対する規範意識であり、それは「閉鎖＝解放」の軸、すなわち地元意識と市民意識という対比と、地域間格差を容認するか拒否するかという「格差＝平準」の軸の２軸で考えるべきであるとしている[84]。鈴木ほか（1978）のコミュニティ・モラールとコミュニティ・ノルムの２つの概念は実践共同体においても応用できると考えられる。たとえば実践共同体のコーディネーターはコミュニティ・モラールの向上が重要な役目であるとともに、コミュニティ・ノルムの硬直化を防止し、「閉鎖＝解放」「格差＝平準」の発展的緊張（developmental tensions）を維持することが重要である、ということができよう。

MacIver and Page（1949）、鈴木ほか（1978）の研究を踏まえて、船津・浅川（2014）はコミュニティ意識の分析枠組みを表５のように提示している。

83）鈴木ほか（1978）、10-13ページ。
84）鈴木ほか（1978）、13-16ページ。

表５　コミュニティ意識の分析枠組み[85)]

①「認識」レベル	「コミュニティ・コグニション」（コミュニティ認識） 「閉鎖＝解放」「格差＝平準」
②「感情」レベル	「コミュニティ・アタッチメント」（コミュニティ帰属感） 「われわれ感情」、一体感、郷土愛
③「行為」レベル	「コミュニティ・コミットメント」（役割感情） 行事参加、役割就任、地域貢献
④「アイデンティティ」レベル	「コミュニティ・アイデンティティ」（コミュニティにおける自他の関係意識） 依存感情、自他の関係における社会的自我意識

(9)　コミュニティ・オーガニゼーション研究

Ross（1955）や Perlman and Gurin（1972）は、「コミュニティ・オーガニゼーション（community organization）」の概念について検討している。「オーガニゼーション」といってもこの場合は人の集まりという組織ではなく、「共同社会がみずから、その必要性と目標を発見し、それらに順位をつけて分類する。そしてそれを達成する確信と意志を開発し、必要な資源を内部外部に求めて、実際行動を起こす。このようにして共同社会が団結協力して、実行する態度を養い育てる過程」という定義がなされているように、実践や活動を通じてコミュニティを構築育成することである[86)]。Ross（1955）は、地域コミュニティの開発のための活動として、地域コミュニティ開発（community development）、地域コミュニティ組織化（community organization）、対地域コミュニティ関係（community relations）の３つに大別されるとしている[87)]。地域コミュニティ開発は一定のプログラムを地域に導入する

85）船津・浅川（2014）、145ページを参考に、筆者作成。
86）Ross（1955：邦訳）、42ページ。この邦訳ではコミュニティ・オーガニゼーションには「共同社会組織化事業」という言葉が当てられている。
87）Ross（1955：邦訳）においては地域コミュニティには「地域共同社会」という訳語が当てられているが、混乱を避けるため、本論文では「地域コミュニティ」に置き換え

ことで地域住民の自己決定と努力を引き出すものであり、それには外部機関からのプログラム導入、多面的な技術導入、地域住民による資源開発と利用という３つのやり方がある。対地域コミュニティ関係はコミュニティ開発を促進する存在がコミュニティと関係を持つ方法であり、広報、コミュニティサービス、地域参加の３つの方法がある。そして地域コミュニティ組織化、すなわちコミュニティ・オーガニゼーションには、その目標を単一目標にする方法と、総合的な発展を志向して全般的な目標にする方法、コミュニティメンバーによる自律的な目標設定の３つの方法があるとする[88]。３つの活動の比較から、コミュニティ・オーガニゼーションはコミュニティの自律的な活動を促進して問題解決を行う色彩が強いことがわかる。それを裏付けるように Ross（1955）は、コミュニティ・オーガニゼーションの特徴として、⑴自己決定、⑵コミュニティ固有の歩幅（ペース）、⑶地域発信の計画、⑷コミュニティの能力増強、⑸（コミュニティの）改革への意欲、があるとしている[89]。いずれもコミュニティの自律性を求めているといえよう。他方で Perlman and Gurin（1972）は、コミュニティ・オーガニゼーション研究をレビューしながら、その活動について、⑴コミュニティの参加と全体的調和の促進、⑵問題処理能力の増強、⑶社会状況とサービスの改善、⑷不利な立場にある集団の利益の増進、の４つをあげている[90]。Ross（1955）と Perlman and Gurin（1972）の主張に共通するのは、コミュニティ・オーガニゼーションが自律的に問題解決を行う活動であること、そしてそれによってコミュニティ自体の能力向上や調和を促進するということがあげられる。目的の相違はあるが、問題解決活動を通じてコミュニティの学習を促進するという点は、実践共同体に通底するものであるといえる。

ている。

88）Ross（1955：邦訳）、7-28ページ。

89）Ross（1955：邦訳）、31-41ページ。

90）Perlman and Gurin（1972：邦訳）、51-66ページ。

⑽ Bauman（2001）ほかのコミュニティ批判

もちろんコミュニティ研究の中には、コミュニティ概念を批判する研究も含まれる。コミュニティ批判の研究を検討することで、実践共同体に求められる要素は何か、明らかにすることにもつながる。

Bauman（2001）は、コミュニティ概念が無条件によいものと考えられていることに疑問を呈する。それは「温かい」場所であり、安全で、善意を期待できるところであるとされていて、そのようなところで暮らすことを願わない人がいるだろうかと問いかける。しかし現実との差異が存在するとBauman（2001）は指摘する。「想像のコミュニティ」と「既存のコミュニティ」との差異である。そしてそのコミュニティの一員であるという特権を得るためには支払うべき対価があるとする。Bauman（2001）はそれを自由であるとする。「コミュニティを失うことは、安心を失うことを意味する。コミュニティを得ることは―たまたまそんなことがあればだが―即座に自由を失うことを意味する。（中略）問題は、『既存のコミュニティ』の製造法では、安心と自由の間の矛盾が目に余るほど大きくなって、修復が難しくなるということである」としているのである[91)]。この主張からは、Bauman（2001）の考える「既存のコミュニティ」が、伝統的で閉鎖的・保守的なコミュニティ論に立脚していることがうかがえる。Bauman（2001）は社会の発展にともなう変化、具体的には経営の効率化、労使関係の変化といったビジネス環境の変化に加え、貧富の格差拡大に伴う富裕層の閉鎖的なコミュニティの形成、個人のアイデンティティの追求(コミュニティ解体とアイデンティティ獲得は表裏一体のものととらえられている)、多文化主義の進展、グローバリゼーションの拡大などがあげられているが、それらの変化によってコミュニティのもたらすメリットがもたらされなくなっていると指摘する。加えてコミュニケーションのもたらす閉鎖性(内輪意識)や、解体されたコミュニティは復活しないことなどをあげ、楽観的なコミュニティ論に警鐘を鳴らしている。

91）Bauman（2001：邦訳）、7-12ページ。

Bauman（2001）のコミュニティ批判は、伝統的なコミュニティ論を念頭に、その安心をもたらす機能の阻害と、保守性のもたらす弊害を取り上げている。コミュニティの安心や信頼感を醸成する点はメリットの１つであることは間違いないが、こと実践共同体に関しては、それを得るために所属するわけではない。その主目的の違いを踏まえることは重要であるという示唆が得られる。

Blanchot（1983）は Nancy（1999）の主張と前後して、ポストモダン的コミュニティ論を展開している。Blanchot（1983）はまず、人がコミュニティを形成する２つの要因を挙げている。１つは人の有する不充足性、不完全性である。そして人は他者とコミュニケーションすることで承認ではなく意義提起され、その不可能性を認識することによって存在するとする。しかし無数の人々と興隆することは自己をその中へ拡散させてしまうがゆえに、有限性のあるコミュニティを求めるとしているのである[92)]。もう１つは友愛である。未知の者への友愛は人々に「共同体をもたない人びとの共同体」を打ち立てることにつながるとしている[93)]。その上で Blanchot（1983）は、「伝統的共同体」と「選択的共同体」という分類を提示している。伝統的共同体は本論文で繰り返し取り上げている伝統的なコミュニティ論といってよいであろう。それに対して選択的共同体は「この共同体が、それなしには共同体が生じえなかったであろうある選択のまわりに成員を糾合するひとつの決定によってしか存在しない、という意味においてである」とされるコミュニティである。そこには伝統性や地域性といった要因は存在せず、またそれによってもたらされる安心や承認といったものとも断絶される。社会と対立する形であってもその選択によって存在するコミュニティである。この対比は伝統的コミュニティ論と異なる、ポストモダン的コミュニティの内容を理解する上で重要である。実践共同体の概念と比較して考えると、二項対立的な２つのコミュニティ概念は、二者択一を迫る形になっている。実践共同体は伝統

92）Blanchot（1983：邦訳）、18-20ページ。
93）Blanchot（1983：邦訳）、50-57ページ。

的コミュニティ論のもたらすメリットを享受しつつも、より自由で柔軟性に富んだ概念であることを追求するものである。

Nancy（1999）は、ポストモダン的観点から、コミュニティ概念そのものへの考察を深めている。そしてコミュニティの幻想性、無為性を主張している。Nancy（1999）は共同体の崩壊、解体が現代世界において最も苦痛に満ちた出来事であったというところから論を始めるが、実際は共同体は人々の「喪失の経験」が共同体そのものを成り立たせていたという意味において存在しており、また失われたと指摘し、その幻想性を喝破している。共同体の内在性と親密性という思想や願望があり、そこから波及する社会的絆というものが生み出され、そこから失われた共同体という幻想を作り上げているとNancy（1999）はいう[94)]。ここで取り上げられている共同体は地域性や空間性、具体的な人間関係といったものではない。「共同体は、もとより一個の主体でもなければ、ましてや『自我』よりいっそう豊かな主体でもない」[95)]のである。そして個々人の有限性を共同体が担う、というよりも有限性の体験としてコミュニケーションを通じて体験されるとして、その無為性を指摘しているのである[96)]。

Nancy（1999）の共同体の幻想性・無為性の主張は、実践共同体における実践の重要性を際立たせるものであるといえる。社会に対立する概念として否定的なコミュニティの考え方はひとえに成員の実践経験と結びついていない、受動的な成員観に由来するものである。コミュニティが幻想をもたらすのではなく、実践によってコミュニティは形成され、そこから学習活動とそれを促進する動力がもたらされると考えられるのである。

⑾ コミュニティ研究と実践共同体

以上のようにコミュニティ研究について概観してきた。コミュニティ研究

94）Nancy（1999：邦訳）、5-23ページ。
95）Nancy（1999：邦訳）、36ページ。
96）Nancy（1999：邦訳）、49-59ページ。

の変遷を見ることで、実践共同体に対して取り入れるべき点が明らかになる。コミュニティの伝統性と地域性がその基盤となっていた時代から、次第にその空間性・表象性・実践性が強調されるにあたり、実践共同体が「共同体」である理由も、その空間性・表象性・実践性に基づく、学習における自律性と自由さであることがわかる。また MacIver（1924）のコミュニティとアソシエーションの分類からも、実践共同体がその間にある概念であり、類似関心に基づくアソシエーションに近いものであると同時に、その共同性をコミュニティから受け継いでいるものであることもわかる。そしてコミュニティ批判研究からは、その幻想性・無為性が指摘されながらも、実践共同体はそのアイデンティティの拠り所として、コミュニティがもつ共同性を継承しなければならないことも考えられるのである。

4．Oldenburg（1989）の「サードプレイス」論

Oldenburg（1989）が提唱する「サードプレイス（the third place：第三の場所）」という概念は、実践共同体にとって多くの示唆をもたらすものである。それは Wenger et al.（2002）が「アイデンティティの拠り所（home of identity）」と表現したように、その居心地の良さをもった交流の場所は、実践共同体にとって不可欠ともいえる要素であり、既存の実践共同体研究にとっても重視されていない部分でもある。Oldenburg（1989）の主張をしっかり吟味することで、実践共同体論をより正確に、より発展的に拡張することができるであろう。

Oldenburg（1989）は、アメリカの近代化と郊外への移住が促進された結果、「インフォーマルな公共生活」といわれる、仕事や家庭とは別の、地域住民の会話によってくつろぎや安らぎを得る場がなくなってしまったと指摘する。ストレスへの対処が個人の自己責任に転嫁され、大量消費によってその解決が図られるような社会へ転換されてしまった結果、仕事生活においても仕事とプライベートの区別が曖昧になってきていると指摘しているのである[97]。その上でその解決においては、家庭、仕事、そして「広く社交的な、

コミュニティの基盤を提供すると共にそのコミュニティを謳歌する場」という３つの経験の領域のバランスがとれていなければならないと主張する。そのような「インフォーマルな公共生活の中核的環境」として、Oldenburg（1989）は「サードプレイス」の概念を提示しているのである[98]。

Oldenburg（1989）はサードプレイスの特徴についてまとめている。それは⑴中立の領域である、⑵人を平等にする、⑶会話が主な活動である、⑷たいてい近所にあり、利用しやすい、⑸常連がいる、⑹雰囲気に遊び心がある、である。順に説明すると、⑴中立の領域というのは、職場でも家庭でもないところを意味する。Oldenburg（1989）はサードプレイスを「家庭と仕事から逃れられる安らぎの場」と見なすだけでは不十分だが、対比のきっかけになるという意味はあるとしている。サードプレイスは文字通り「第三の場所」であり、その存在意義は職場と家庭と比較することで明らかになる。「わたしたちは自分の一番好きな仲間から逃れることが大いに必要」という言説は、サードプレイスを考える以外でも注目に値する[99]。

⑵人を平等にするというのは、サードプレイスでは職場や家庭などの関係や世俗の地位から切り離され、誰でも平等になれ、誰でも受け入れられるということを意味する。これは実践共同体に重要な意味をもたらす。すなわちこの特徴が学習を促進すると考えられるからである[100]。⑶会話が主な活動である、について Oldenburg（1989）は、サードプレイスでは会話が促進されるためにルールを守ることが求められ、それが実行できない人は毛嫌いされるといった形での暗黙のルールがあるとしている。実践共同体ではファシリテーションやコーディネーターのマネジメントという形でそれが構築されるが、参加者はそれを参加によって習得する必要があるのである[101]。⑷たいてい近所にあり、利用しやすいというのは、そこに行けば誰かと話ができると

97）Oldenburg（1989：邦訳）、49-56ページ。
98）Oldenburg（1989：邦訳）、56-63ページ。
99）Oldenburg（1989：邦訳）、66-67ページ。
100）Oldenburg（1989：邦訳）、69-73ページ。
101）Oldenburg（1989：邦訳）、84-88ページ。

いう目的で通いやすいということである。⑸常連がいるについて Oldenburg（1989）は、サードプレイスに特色を与える存在であるとしている。新参者にとって常連の存在は閉鎖的に感じられるが、そこに仲間入りするという周辺的参加のプロセスが必要である。⑹雰囲気に遊び心があるというのは、サードプレイスでは楽しい雰囲気を意味しているが、それはもう一度職場や家庭と対比させることでその意味が浮かび上がってくる。実践共同体に求められるのはそのほどよい遊び心である[102]。以上あげた特徴は、実践共同体を特徴付ける上でも非常に有効である。Oldenburg（1989）はサードプレイスを「生来の知恵を磨く本物の錬成所」と表現している。学習の役割を大きくしながらもサードプレイスの特徴を保持している存在を、実践共同体と考えるべきであろう。

Oldenburg（1989）はサードプレイスから個人が受ける恩恵について、⑴目新しさ、⑵人生観、⑶心の強壮剤、⑷社交性のパラドックス、の４つの言葉を使って述べている。順に説明すると、⑴目新しさは日常における刺激というような意味と捉えられる。仕事や家庭の中で自制の効いた生活を送る中で、そこから得られる刺激は少なく、味気ない人格の形成につながるという。サードプレイスは多種多様な人々が集うこと、会話の内容が変化に富んでいること、人々の会話能力が高いことから、常に刺激があるのである[103]。⑵人生観について Oldenburg（1989）は、現代の生活環境の中では人生観は容易にゆがめられてしまうとする。サードプレイスでの会話はそれを正常に戻すことができるとしている。不満や不安を解消し、人生の不条理に対するアドバイスをする。特にサードプレイスでの会話で、家庭と同じく仕事に対して行われるものでは、人生経験豊かなサードプレイスの住人の集合知からのアドバイスやがよくなされ、ユーモアによって異なる視点がもたらされるという[104]。仕事にかんしていえば実践共同体のキャリア促進機能に比するものが

102）Oldenburg（1989：邦訳）、90-92ページ。
103）Oldenburg（1989：邦訳）、99-105ページ。
104）Oldenburg（1989：邦訳）、106-114ページ。

得られると考えられる。⑶心の強壮剤は居心地の良さによって集う人々を元気にすることであり、⑷社交性のパラドックスは、社交場の関係を結ぶ相手から自己を護らなくてはならないこと、すなわち職場に幼なじみの友人を乱入させてはならないが、友人関係を維持する自由も重要である、ということである。サードプレイスは社交性のパラドックスを解消する装置であるとともに、一人ずつでは友人になれなくても、そこに集う人々をひとまとまりに考えることで友人関係を広げることができるのである[105)]。

さらに Oldenburg（1989）は、サードプレイスがたんなる会話の場にとどまらない機能を有していると主張する。たとえば政治運動の基盤となったり、政治家と市民をつなぐ場であったりという機能をアメリカでは伝統的にサードプレイスが果たしてきたとし、そしてそれは失われつつあると指摘している。このような機能はサードプレイスに人がなにげなく集まる会合の習慣によって作用する[106)]。またサードプレイスはコミュニティにおける監視機能を果たしたり、家庭生活の問題発生を未然に防ぐ機能を果たしたりすると指摘する[107)]。Oldenburg（1989）はサードプレイスが「正しく機能すれば」コミュニティの中で一定の役割を果たすことができると主張しているが、この点は実践共同体にとっても示唆深い。サードプレイスの特性をある程度備えた実践共同体は、正しく機能すれば学習を促進するといえるからである。そして Oldenburg（1989）の指摘するような議論の促進、ネットワークの連結、相互監視、個人的問題へのケアといった機能は、実践共同体にも適用可能と考えるからである。

Oldenburg（1989）の提唱するサードプレイスは、実践共同体とどのような関係にあるのか。実践共同体の定義（Wenger et al., 2002）やその構成要素の考察（松本、2015b）から考えると、サードプレイスは実践共同体の上位概念とも考えることができる。サードプレイスは学習以外の活動もできる

105）Oldenburg（1989：邦訳）、123-130ページ。
106）Oldenburg（1989：邦訳）、132-141ページ。
107）Oldenburg（1989：邦訳）、145-155ページ。

しそれが主要な活動であるが、学習の場にすることもできる。しかしサードプレイスは学習を目的にする共同体ではないので、両者を同じものにすることはできない。しかし Oldenburg（1989）の考えるサードプレイスの個人が受ける恩恵を、実践共同体では得られないかといわれるとそうではない。むしろこの点こそが従来の実践共同体の議論に不足している点である。Wenger et al.（2002）が実践共同体をアイデンティティの拠り所（home of identity）としているように、共同体のメンバーから安らぎや刺激を得るという意味合いは少なからずある。そして市川（2001）の指摘するように、関係志向的な学習意欲も影響するからである。

もう１つ、Oldenburg（1989）の指摘するサードプレイスの特徴は、実践共同体における学習を促進する要素としても考えることができる。特に⑴中立の領域である、⑵人を平等にする、という点である。組織における上下関係などから解放されることは、Edomondson（2012）の提唱する学習を促進する要素の１つ、「心理的安全」を高める。⑹雰囲気に遊び心がある、についても同様である。そして⑶会話が主な活動である、⑸常連がいる、といった特徴は、活発な相互作用を可能にするであろう。

表６　サードプレイスと実践共同体の比較

次元	サードプレイス	実践共同体
目的	やすらぎ・刺激	学習・交流
規模	数人から十数人	数人から数百人
寿命	基本的に長期	短期から長期（学習の継続性による）
場所	固定、同じ場所にある	柔軟、分散していてもよい
同質性	同質（主要メンバーは固定）	同質・異質どちらもある
頻度	頻繁（毎日）	頻繁ではない（週１～月１）
境界	越えない	越える
自発性	自発的	自発的あるいは意図的
制度化	されていない	されることもある

実践共同体を見る上での Wenger et al.（2002）の提唱した次元に従ってサードプレイスと比較すると表６のようになる。

５．プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ

松本（2015a）において、ラーニング・コミュニティ（learning community）と生涯学習、および実践共同体の関連性について考察した。簡単に振り返ると、ラーニング・コミュニティは「学習の目的のために知的相互作用に取り組む人々の集団」[108]（Cross, 1998）という包括的な定義もあるが、その内容は大学内などで教育者主導で構築される、学習者と教育者の相互作用を基盤として教育促進のための共同体、といえるものであった。また Tosey（2006）の提唱する「ピア・ラーニング・コミュニティ（peer learning community）」においては、全人格的教育（holistic education）、コミュニティの相互作用（community interaction）、ファシリテーション（facilitation）、構造的な統合（structural integration）、力の共有（power sharing）、境界のマネジメント（boundary management）という、ラーニング・コミュニティを特徴付ける６つの次元が提唱されていた。ラーニング・コミュニティは実践共同体を内包する存在であるとともに、実践共同体の方が学習者の主体性と多重成員性を重視したより柔軟な概念であるということが指摘された[109]。

本節ではその補足として、「プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ」（professional learning community：以下 PLC）の概念を検討しておく。大河内（2015）によると、プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティは学習を集団レベルの活動としてとらえ、認知心理学に加えて Senge（1990）に代表される組織論の影響を受けている概念であるとされる。それはどのようなものであろうか。

Senge（1990）の「学習する組織」論は松本（2013）において実践共同体との比較考察を行っているが、その考え方は学校組織にも及んでいる

108）Cross（1998），p.4.
109）松本（2015b）

(Senge et al., 2012)。その考え方は教室・学校・コミュニティにシステム思考（system thinking）をはじめとした学習の５つのディシプリンの考え方を導入することによって変革をもたらすことであるが、PLC の考え方とは共通点と相違点がある。まず共通点は、学校組織に関係する多様なメンバーを教育実践や学校改革に参加させることである。これは PLC の基本的な考え方でもある。次に学校組織と地域コミュニティを一体と考えて教育実践を行うことである。これは企業組織においても Senge（1990）が提唱していたことである。地域との関係がより深い学校組織において、その連携を強化することは自然な流れであるといえよう。次に現場の実践による学習によって教育変革をもたらすという考え方である。Senge et al.（2012）は「学習する学校（school that learn)」という概念を導入し、「学習する組織」を学校組織に援用しているが、後述するように学習に対する考え方は異なっていても、教育実践に関わるメンバーが学習するという姿勢は軌を一にする。そしてその現場での学習におけるリーダーシップの重要性を指摘していることである。背景にあるリーダーシップ理論は教育学的パースペクティブから生じるものと経営学的なそれという形で異なってはいるが、後述するように PLC は明確にリーダーシップの重要性を議論している。Senge et al.（2012）においても「変革をうまく進めるためには、あらゆるレベルでのリーダーシップが必要」[110] として、その必要性を強調している。

次に相違点である。まず Senge et al.（2012）の「学習する学校」論は学校それ自体を「学習する組織」に変革することが重要視される。それに対してプロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ論は、学校組織の中に PLC を形成することで学習を生起することから始まる。主要な学習主体は教育に携わる教師およびその他の学校スタッフであることは共通しているが、そのとらえ方が違っているといえよう。２つめに学習のスタイルについてである。「学習する学校」論の学習スタイルはいうまでもなく５つのディ

110）Senge et al.（2012：邦訳)、483ページ。

シプリンを組織レベルで体得・実践することである。その方法論は Senge（1990）において詳細に述べられている。しかし PLC 論においては明確な学習スタイルの議論は、少なくとも収束してはいないといえる。3つめにリーダーシップの考え方である。先述の通りリーダーシップが必要であるという考え方では一致しているものの、「学習する学校」論は、組織学習の推進役としてのリーダーシップが求められているのに対し、PLC 論はむしろ階層的な上司・部下の関係に基づくリーダーシップよりも、それぞれのメンバーの主体性を発揮するという意味でのリーダーシップであるといえる。後述するように PLC 論に求められる主要なリーダーシップは集権的ではなく分散型リーダーシップである。そして最も重要な相違点は、コミュニティにかんする理解である。Senge et al.（2012）の「学習する学校」論は Senge（1990）の「学習する組織」論と同様、コミュニティを学校(あるいは企業)を取り巻く地域コミュニティとして考えている。PLC との違いについて Senge et al.（2012）は、「わたしたちは『コミュニティ』という語を、ある学校の中にある『学習共同体 learning community』というような、ある組織の中の一群の人々を意味するモノとして用いているのではない。（中略）私たちの見解では、学習するコミュニティは、そこにある学校と相互互換的なコミットメントを共有するものである」[111] と明確に区別している。PLC は Senge et al.（2012）の中に出てくる「学習共同体 learning community」というものも含め、学校組織と重層的な関係を成し、さらに地域コミュニティを巻き込んだ多層的なコミュニティ構造であるといえる。このように PLC 論は Senge（1990）の研究から影響を受けており共通点も多いが、相違点も多いといえる。

Stoll et al.（2006）はプロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ研究をレビューし、教育改革の進展にはキャパシティ（capacity)、すなわちモティベーション、技能、ポジティブ学習、組織条件、文化、支援のインフラ

111）Senge et al.（2012：邦訳)、700ページ。

の複雑な混合概念、の構築が必要であるとしている。そしてPLCはそのキャパシティの持続的な向上に不可欠なものであるとしている[112)]。キャパシティの考え方は注目する必要がある。すなわちStoll et al.（2006）はたんにPLCは教育技能を高めるだけでなく、教育全体を支援する枠組みであること、特に最初に位置づけている教師のモティベーションの維持向上に必要なものであるとしているのである。これは実践共同体においても同様の考え方である。その上でStoll et al.（2006）はPLCの定義について、さまざまな文脈でいろいろな定義があるため、決定的な定義は存在しないとした上で、広く合意されている考え方として、「集合的事業のように管理される、進行中の、省察的で、協働的で、包括的で、学習に根ざした、成長促進的なやり方で、実践を共有し批判的に質問する人々の集団」という説明をしている[113)]。この定義はPLCを理解する上で基本になるといえよう。この定義的説明の特徴は、PLCを学校組織と同一とみなしておらず、むしろそれを包摂する概念であるとみなしているという点である。この点も実践共同体と軌を一にする考え方であり、少なくとも先述のラーニング・コミュニティよりは実践共同体に近い概念であるといえる。

Stoll and Louis（2007）はPLCという言葉が、たんに個々の教師の学習に焦点を当てているのではなく、凝集的集団のコンテクストの中での専門的学習や、教師、生徒、学校リーダーの生活に浸透する対人ケアの倫理の中で起こる集合的知識に焦点を当てていると提唱している。Little and Horn（2007）は、学校内で起こる問題を「通常化（normalizing）」する（「大丈夫、心配ない」や「私たちみんなに起こること」などといった問題として片付けてしまうこと）という現象について、PLCでの対話や議論が安易な通常化を抑制し、PLCの学習資源に変えることができることを指摘している。またStoll and Louis（2007）は、PLCのメンバーシップが学校内の教師のグループという範囲から学校全体、学校外、国境を越えて広がっていること、PLCの

112）Stoll et al.（2006），p.222.
113）Stoll et al.（2006），pp.222-223.

知識基盤も教科関連のものから外部知識、教科外の多様な知識個々の生徒の知識、文化を越えた知識へと広がっていることを指摘している[114]。この点については Stoll, Bolam, and Collarbone（2002）においても、拡張された共同体（extended community）を構築することが、学校という社会的な共同体にとって重要であり、内的共同体とより広い共同体とのギャップを埋めることがリーダーの責務であるとしている[115]。

より実践的な PLC の条件を考察しているのは Westheimer（1999）である。彼はプロフェッショナルが構築する共同体の条件として、コミュニティ研究から、⑴共有された信念、⑵相互作用と参加、⑶相互依存、⑷個人と少数派の視点への関心、⑸意義深い関係性、の５点を抽出している。その上で Westheimer（1999）は、教師の共同体を構築することで学校を改革しようとする取り組みには特徴があるとして、⑴学校の小規模化、⑵マグネット・プログラム（学校の信念に基づいた特色ある学校づくり）、⑶現場主義のマネジメント、⑷同僚関係と協働の構築、の４点をあげている[116]。Stoll et al.（2006）は PLC の３つの単語（professional, learning, community）のうち PLC の考え方の中核となるのは共同体であるとして、Westheimer（1999）の研究を取り上げ、学校コミュニティの意義は教師、生徒、学校リーダーの人生にまで至る対人ケアの倫理であると指摘している[117]。

Hord（2006）は、プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティを、持続的なプロフェッショナル的学習を通じて教授の質を高めるコミュニティであるとし、それを可能にする５つの要素をあげている。それは、⑴共有された信念、価値、ヴィジョン、⑵分散的・支援的リーダーシップ、⑶構造的・関係的に支援された状態、⑷集合的な・意図的学習とその応用、⑸共有された個人の実践、の５つである[118]。順に説明すると、⑴共有された信念、価値、

114）Stoll and Louis（2007），pp.1-5.
115）Stoll, Bolam, and Collarbone（2002），p.57.
116）Westheimer（1999），pp.74-76.
117）Stoll et al.（2006），p.225.
118）Hord（2006），pp.10-12.

ヴィジョンは、PLC の基礎的要素であり、メンバーが共通の目的を理解するためのものである。ヴィジョンは生徒の学習を増加させる活動の変化や向上によって構築されるとする。⑵分散的・支援的リーダーシップは、部署や地位の方針によって規定される境界内でのパワーと権限、意思決定の共有を意味している。管理者＝校長はその実現の鍵を握る存在であるとする。Ancona and Bresman（2007）の提唱する分散型リーダーシップ（shared leadership）は、特に PLC にとって重要な要素であるといえる。⑶構造的・関係的に支援された状態とは、生徒と会う時間、場所、学習を共に行うスタッフを方針と資源といった構造的・物理的状態を指す。この条件面を PLC の要素に組み入れているのは興味深い。Hord（2006）はここまでの３つの要素は残り２つを支援するインフラであると主張している[119]。⑷集合的な・意図的学習とその応用は、PLC の主要な役割であり、学校全体の決定に基づいて、個々のスタッフが生徒のニーズをふまえて教育方針を決めるものである。そのために必要な学習は逐次的で仕事に根ざしているもので、その学習への練達、および教室での実行は省察、議論、検証、新しいプロフェッショナル学習の考察といったサイクルによってなされるとする。⑸共有された個人の実践は、教室での教育が同僚同士の助け合いによって可能になるとするものである。PLC のメンバーが知っていること・知らないこと、学ぶ必要のあることについて正直でオープンな態度を持っていることにより、PLC の学びは発展するとしている[120]。Hord（2006）の５つの要素は、PLC を考える上で有用であり、なおかつ組織論との共通部分も多い。他方で Stoll et al.（2006）は PLC の５つの特徴として、⑴共有された価値とヴィジョン、⑵集合的責任、⑶プロフェッショナルな省察的質問、⑷協働、⑸個人と同じく集団が学習を進展させる、の５つをあげており、Hord（2006）とは若干異なる視点をもっている。⑴共有された価値とヴィジョンは Hord（2006）であり、⑵集合的責任については、PLC 研究でも広く一致している部分で

119）Hord（2006），p.12.
120）Hord（2006），pp.12-13.

あり、生徒の学習によって集団での責任をもつことをあげている。(3)プロフェッショナルな省察的質問は「省察的対話」「実践の脱私物化」のような概念と同じく、相互作用によって知識創造や知識の共有、問題解決や教育計画・カリキュラムの共同発達といったものが含まれる。(4)協働は文字通り多様な人々と教育目的の達成のために活動することであり、(5)個人と同じく集団が学習を進展させるという姿勢は、すべての教師は学習者であり、教師の自己研鑽、Senge（1990）のいう自己マスタリー（personal mastery）が重要であること、そして学校や共同体の集団的学習が学校を発展させるという考え方の２点を含んでいる[121)]。Stoll et al.（2006）の PLC の特徴はより知識創造・知識共有という色彩を強く帯びている。学習や知識創造が学校を発展させるという姿勢は、教師の教育・学習を支援する組織マネジメントの色彩の強い Hord（2006）の特徴とは少し異なっている。もちろん両方重要な考え方であることはいうまでもない。

プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティを考えるにあたっては、そのコミュニティの範囲、すなわちどこまでが PLC の範囲なのかを考えることが不可欠である。Stoll et al.（2006）の説明的定義では PLC の学習や教育活動に携わる人々を包括的にとらえているが、その範囲は研究の進展と共に拡大しているといえる。Bolam, Stoll and Greenwood（2007）はティーチング・アシスタントや教育に携わらないサポートスタッフが PLC において果たす役割が見過ごされているとして、その重要性を強調している。実践共同体をサポートするスタッフワークの重要性は松本（2011）でも指摘している。Jackson and Temperley（2007）は、PLC はそれ自体内向きになって学習が阻害されることを回避するため、学校間ネットワークを利用して PLC 同士が連結し、ネットワーク学習を構築するネットワーク化されたラーニング・コミュニティ（networked learning community）を提唱している。これによって公的な知識（各種理論など）と実践家の知識（各 PLC 内の実線に

121）Stoll et al.（2006）, pp. 226-227.

表７　新しいプロフェッショナル・ラーニング・コミュニティのメンバーシップと知識ベース[122)]

PLC メンバーシップのシステム的拡大	PLC で有効な知識ベース
教師のグループとしての PLC（本来の PLC の定義）	教育的・それに関連する知識
サポートスタッフ、統治する団体：学校会議のメンバーと生徒を含む学校を越えた拡張的メンバーシップ	他のプロフェッショナルな知識（例：生徒の知識の特定の学習ニーズに対する知識）、外部知識（例：財務的視点）
学校ネットワーク、学校部署あるいは地域の識者（例：いつもは PLC としてのネットワークや部署、メンバーとしての部署の人材を時々含む）を含む拡張されたメンバーシップ	より大きな量の同じ知識ベースへのアクセス
保護者を含む学校を越えて拡張されたメンバーシップ	個々の子どものローカルな知識と個人的な知識
さらに広いコミュニティと他のサービスを含む学校を越えて拡張されたメンバーシップ	他のプロフェッショナルな知識（例：健康、社会的ケア、ビジネスなど）
他の文化的コンテクストからの参加者を含む、国境を越えて拡張されたメンバーシップ	文化間知識

よって生み出された文脈的知識）、新しい知識（ネットワーク間の協働によって生み出された知識）という３つの知識フィールドでの相互作用が起こるとしている。Stoll et al.（2007）は国境を越えた PLC ネットワークが文化間学習を促進するとしている。Stoll and Louis（2007）は本来の PLC のメンバーは教師のグループであるとした上で、PLC のもつ知識ベースを拡大させるためにも、そのメンバーシップはシステム的に拡大する必要性を強調している（表７）。

そして Mitchell and Sackney（2007）はそのような多様なメンバーを巻き

122）Stoll and Louis（2007），p.5 を参考に、筆者作成。

込んで PLC を拡大させる適応的リーダーシップ（adaptive leadership）が求められるとしている。メンバーシップに誰かが含まれるのと、その人たちを関与させるのは別の問題である。多様なメンバーの実践を引き出す努力も求められるといえよう。Mulford（2007）は学校内外の社会関係資本（social capital）を結びつける実践が、重層的な PLC を構築する原動力になるとして、社会的プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ（social professional learning community）を提唱し、そのためのリーダーシップと実践のあり方についてまとめている。

プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティを発展させる方法として Stoll et al.（2006）は、⑴学習プロセスに焦点を当てる、⑵人的・社会的資源をベストに作り出す、⑶構造的資源を管理する、⑷外部の関係者と相互作用し活用する、の４点をあげている。順に説明すると、⑴学習プロセスに焦点を当てる、については PLC は知識や技能を向上させるための基盤に基づいた学習機会が提供されるべきであるとしている。それは教師のローカルなニーズや所属する部署や集団によって構築されるのが望ましい。しかし公式の機会と同様、現場の経験を基盤にした学習も重視される必要があるとしている。その上で Stoll et al.（2006）は、個人の学習から集団的学習に学習を転換して知識を生み出すことを提唱している。この点について Lave and Wenger（1991）や Wenger（1998）といった実践共同体の研究が引用されていることに注目したい。PLC の構築は、教師間の集団的学習に作用するものであるということが暗示されている。Little（2002）は教師間の実践共同体を会話分析によって研究し、その現場での問題解決や学習を促進する枠組みとして、３つの命題とそれを統合的に考えることを提唱している。それは⑴実践を協働的作業における質問によって見える化し結果や効率性を透明化する「実践の表象化」、⑵教師を実践や問題向上への取り組みに導く「実践への導入」、⑶参加と相互作用がどのように組織化され、教師の学習と実践の変容を生み出すかという「相互作用の規範」、そして⑷３つの命題を共に発展させる「発展の軌跡」から成るものであり、個人の学習を発展させる具

体的な方向性を提示している[123]。

⑵人的・社会的資源をベストに作り出す、についてはPLCを構築するリーダーシップと、それを効果的に運用するための社会的資源について考察されている。まずリーダーシップについては教頭・校長のリーダーシップとして、①学習する文化を創造する（Schein［1985］に立脚）、②生徒から教師まですべてのレベルでの学習を確かなものにする、③教育の現場研究に対して向上を図る質問ベースのリーダーシップ（Stoll, Bolam, and Collarbone, 2002）、④教育改革の過程においてメンバーの感情に配慮したリーダーシップ、といったものをあげている。その上で多くの研究が指摘する重要なリーダーシップとして、分散型リーダーシップ（distributed leadership）をあげている。分散型リーダーシップには多様な考え方があるが、PLCの考え方からしてもそれは、Ancona and Bresman（2007）の提唱するような権限委譲モデルというより、Seifter and Economy（2001）の提唱するような、創発的なマルチ・リーダーシップであるということができよう。Gronn（2003）は教育現場における集権的リーダーシップを批判しているが、提唱しているのはリーダー・フォロワー関係に基づいたリーダーシップではなく、組織全体が結合体（conjoint agency）となるような、ゆるやかなつながりと創発性による分散型リーダーシップであるといえる[124]。そしてStoll et al.（2006）は、PLCを発展・維持するためには人的・社会的資源を形成し効果的に用いることが鍵となるとして、その中でも信頼、ポジティブな仕事関係、ポリティクスやコンフリクトといった集団ダイナミクスへの対応をあげている[125]。

⑶構造的資源を管理する、についてStoll et al.（2006）は、時間、空間の効果的利用を提唱しているし、⑷外部の関係者と相互作用し活用する、については共同体外の支援とパートナーシップ、ネットワークを積極的に活用することを提唱している。これはStoll, Bolam, and Collarbone（2002）におけ

123）Little（2002），pp.934-937.
124）Gronn（2003），pp.285-288.
125）Stoll et al.（2006），pp.235-239.

る拡張された共同体（extended community）の考え方であるとともに、実践共同体の重層的構造（松本、2015b）とも関連する。そして Stoll et al.（2006）はその他のプロフェッショナル・ラーニング・コミュニティの形成・発展につながる概念として、個人の変革への志向、学校の規模、段階（小・中・高校）、学校の立地、生徒との特定の交流、地域共同体、より広い共同体、政策決定、プロフェッショナル学習の基盤などをあげている[126)]。

Mitchell and Sackney（2007）は、プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティを発展させることで学校の向上につながる効果的な実践の枠組みを提示している。それは⑴思いやりがあり尊重できる学校環境、⑵共鳴するカリキュラムと指導、⑶学習の評価、⑷理解を進める中断と早期の介入、⑸真のパートナーシップ、⑹適応的リーダーシップ、の６つからなる。順に説明すると、⑴思いやりがあり尊重できる学校環境は、PLC としての学校を理解するということは、学校をスタッフ、家族、共同体メンバーが子どもや若者の健全な成長と学習の成功を支援する環境を作り出すことに関与する場所と考えることであるとしている。⑵共鳴するカリキュラムと指導は、柔軟で適応的で、すべての生徒に多様な発展的学習環境を提供するものである。⑶学習の評価は、それ自体が的確に実施されることが求められるし、PLC はそれを支援する。⑷理解を進める中断と早期の介入は、多様な人々が学習環境の向上のために関与することを含むとする。⑸真のパートナーシップとは、情報共有にオープンであること、貢献意欲、仕事関係、方針への同意、責任や資源リスクと利益を共有することへの関与といったものによって特徴付けられるものである。そして⑹適応的リーダーシップは、学習者としての生徒や保護者など多様な人々を巻き込み、分散的なリーダーシップの考え方を用いて関与させるものである。Mitchell and Sackney（2007）はこれらの実践が連続的・循環的に行われることが学校と教育の発展に求められるとしている[127)]。

126）Stoll et al.（2006），pp. 238-246.
127）Mitchell and Sackney（2007），pp. 35-40.

プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティを持続的に運用することについて Hargreaves（2007）は、PLC の概念が浸透していくにつれて、PLC の本来の意味からは乖離し、短期的な結果を求める文化を恐れる、データ重視の追加チームのようになってきていると警鐘を鳴らしている[128]。効率重視の文化が現場の学習を重視する本来の PLC のあり方から外れてきているという指摘は、実践共同体でも肝に銘じておくべきことであるといえよう。その上で Hargreaves（2007）は、事例研究から持続的な PLC の 7 つの条件についてあげている。それは⑴問題を具体的にし学習と人間関係を深めるという「深さ（depth）」、⑵)すべての生徒に恩恵をもたらすような学習について扱う問題の「広さ（breadth）」、⑶短期的な結果を焦らず、時間をかけて世代をまたいでも価値ある学習を追求する「持久力（endurance）」、⑷教師のみの利益ではなく生徒・教師・学校全体に権利が平等に与えられる「正しさ（justice）」、⑸目的中心のリーダーシップと効果的なネットワーキング、交配的な実践によって促進される教育的「多様性（diversity）」、⑹資金や人々を無駄遣いせずエネルギーや資源を保持・再生する「資源の豊富さ（resourcefulness）」、⑺よりよい未来のために過去を尊重する「保持（conservation）」、をあげている。実践共同体形成の 5 つの段階（Wenger et al., 2002）の 4 段階目は維持・向上（stewardship）であるが、Hargreaves（2007）の指摘は維持・向上段階の実践的な考察につながるといえる。

Ⅲ　考察

以上のように本論文では、コミュニティ研究、サードプレイス研究、プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ研究についてレビューしてきた。本節ではこれらの研究と実践共同体研究を比較することで、実践共同体概念の精緻化に取り組みたい。

128）Hargreaves（2007），p. 183.

1．コミュニティ研究と実践共同体

コミュニティ研究から実践共同体を考えると、「共同体」としての概念をより深く理解することができる。しかし Hillery（1955）が多くのコミュニティ研究の定義をレビューしたにもかかわらず、人々が集まっていること以上のものが見いだせなかったことからもわかるように、コミュニティの定義自体も多岐にわたり、決定的な定義は出てきていない。しかしそれらの研究から実践共同体概念を精緻化することはある程度有効であると考える。以下ではコミュニティ研究からみた実践共同体について考察していく。

(1) MacIver（1924）のコミュニティ・アソシエーション論と実践共同体

コミュニティ研究の代表にして、コミュニティ概念を初めて学問的に用いたといわれる（松原、1976）、 MacIver（1924）のコミュニティ研究は、社会の中に含まれる集団について、「コミュニティ」と「アソシエーション」という２つの概念を提示している。改めて説明すると、「コミュニティ」は「村とか町、あるいは地方や国とかもっと広い範囲の共同生活のいずれかの領域」である。それに対してアソシエーションは、「社会的存在がある共同の関心（利害）または諸関心を追求するための組織体（あるいは＜組織される＞社会的存在の一団）」「共同目的にもとづいてつくられる確定した社会的統一体」[129] であるとする。そしてコミュニティとアソシエーションを分けるものとして MacIver（1924）があげたのが関心（interests）の違いである。コミュニティは多数の人が追求する１つの包括的関心である「共同関心」に基づいて構築されるのに対し、アソシエーションは複数の個人が型としては類似もしくは同一である関心を別々に追求する「類似関心」に基づいて構築されるとする。そして「コミュニティとは、共同生活の相互行為を十分に保証するような共同関心が、その成員に認められているところの社会的統一体である」とした上で、「アソシエーションは固有の仕方でコミュニティの関

129）MacIver（1924：邦訳）、46-47ページ。

心を追求するものであるから、コミュニティはコミュニティの関心を支えるために、アソシエーションを創出せねばならない」としているのである[130]。これらの記述をふまえると、MacIver（1924）における概念では、実践共同体に近いのはむしろアソシエーションの方であるといえる。コミュニティは現代の分類では地域に根ざした地域コミュニティに近いものである。しかし実践共同体＝アソシエーションとしてしまうのは早計である。本項の目的は実践共同体をどちらかに決めることではなく、その概念を精緻化することにある。つまり MacIver（1924）のコミュニティ論に実践共同体をよく説明できる特徴を見出すことが必要である。それはアソシエーションとその派生的概念とされる企業・組織との区別をつける上でも有効である。

MacIver（1924）のアソシエーション論で特徴的なのは、関心の分類とその発展であるといえる。類似関心と共同関心の関係については、「コミュニティとは、共同生活の相互行為を十分に保証するような共同関心が、その成員に認められているところの社会的統一体である」とした上で、「アソシエーションは固有の仕方でコミュニティの関心を追求するものであるから、コミュニティはコミュニティの関心を支えるために、アソシエーションを創出せねばならない」としている[131]。つまりコミュニティで満たされない類似関心を追求するところがアソシエーションである。ここでいうコミュニティとアソシエーションの関係は、企業組織と実践共同体との関係にも援用できる。松本（2015b）の３つの輪モデルにもあるように、企業組織で学べないことを学ぶ場として実践共同体は構築されるからである。しかし MacIver（1924）は、「コミュニティの生活は特殊なタイプの共同関心に応えるアソシエーションの、それら鋳型の中に閉じ込められない」「コミュニティの生活はアソシエーションの諸形式を包含しており、いわばアソシエーションの骨格に、生きた血と骨をまとわせるようなものである」[132] とも述べている。企業組織と

130）MacIver（1924：邦訳）、133-141ページ。
131）MacIver（1924：邦訳）、133-141ページ。
132）MacIver（1924：邦訳）、152ページ。

実践共同体に置き換えれば、企業組織で得られた問題意識や課題が実践共同体の構築・維持の原動力になるということである。企業組織と実践共同体の循環的学習（松本、2015b）を裏付ける仕組みがここで説明されている。

他方で MacIver（1924）のコミュニティ発展における社会化と個性化という２つの方向性については、実践共同体に重要な示唆をもたらしてくれる。MacIver（1924）はコミュニティの発達を成員の共同生活を通じた心的発達であるとし、それは意図的な人間の活動を通じて達成されるとする。そして「社会性と個性は、社会化と個性化の過程に対応する特質をもっているので、＜社会性と個性は同一歩調で発達するものである＞」こと、「コミュニティの分化は、社会的諸個人におけるパーソナリティの成長に相関している」ことを提唱している[133)]。コミュニティにおける成員の自律性と多様性、包摂性がその成員の個性化と社会化を同時に発達させ、それがコミュニティ発達の原動力となるのである。成員の個性化と社会化に基づく参加の進展と相互作用がコミュニティの発達につながるというのは実践共同体にとっても同一である。さらに個性化と社会化が同一に発達するというのは、実践共同体の参加のレベル、Wenger（1998）における参加・不参加の考え方にもつながっていくといえる。MacIver（1924）のコミュニティ・アソシエーション論から考えれば、実践共同体は、コミュニティの包摂性を備えた、学習という類似関心をもって集まったアソシエーションと考えることができるのである。

⑵ コミュニティ研究と実践共同体

本論文では多様なコミュニティ研究についてレビューしてきた。ここではそれらの概念を手がかりに、実践共同体について考えてみよう。

広井（2010）はコミュニティについて「人間が、それに対して何らかの帰属意識をもち、かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助（支え合い）の意識が働いているような集団」と定義している。今回みてきたコ

133）MacIver（1924：邦訳）、247-272ページ。

ミュニティの定義の中では最も実践共同体に近いといえる。その上で、コミュニティをみていく上での３つの視点として、「生産のコミュニティ」と「生活のコミュニティ」、「空間的コミュニティ（地域コミュニティ）」と「時間的コミュニティ（テーマコミュニティ）」、「農村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」[134] という類型によって整理している。この分類はとても有益であるが、最も注目すべきは「テーマコミュニティ」の概念である。関心を呼び実践につながるテーマをもったコミュニティは実践共同体に近い存在であるといえる。

Park and Burgess（1921）はコミュニティの原理として共生（symbiosis）をあげている。多種多様な種が共に生きる社会的共生（social symbiosis）は、コミュニティの存在する上で重要な要素である[135] という主張は、実践共同体にも一部当てはまるといえる。 MacIver（1924）にも通じる連帯と支え合いの精神をそこに見ることができる。それをより具体的にしたのが MacIver and Page（1949）のコミュニティ感情（community sentiment）である。その３つの構成要素は「われわれ感覚（we-feeling）」「役割感覚（role-feeling）」「依存感覚（dependency-feeling）」とまとめることができる[136]。船津・浅川（2014）はこの３つに加えて、コミュニティ自体の認識である「コミュニティ認識」を合わせて、コミュニティ・コグニション、コミュニティ・アタッチメント、コミュニティ・コミットメント、コミュニティ・アイデンティティの４つにまとめている。これらのコミュニティ感情は、実践共同体の成熟度を示すものとして考えることができよう。加えて鈴木ほか（1978）の「コミュニティ・モラール」「コミュニティ・ノルム」の２つの概念も、実践共同体に援用することができると考えられる。

Ross（1955）や Perlman and Gurin（1972）は、「コミュニティ・オーガニゼーション（community organization）」の概念について検討している。問

134）広井（2010）、13-19ページ。
135）Park and Burgess（1921），pp.169-171.
136）MacIver and Page（1949），p.291-293.

題解決活動を通じてコミュニティの学習を促進するというこの概念はコミュニティそのものではないが、地域コミュニティの活性化活動などと通底するものがあるといえる。

2．サードプレイスと実践共同体

Oldenburg（1989）が提唱する「サードプレイス（the third place：第三の場所）」の概念は、実践共同体に多くの示唆をもたらす。MacIver（1924）でも述べられているように、コミュニティ、そして実践共同体は成員の相互作用をもとに発展する。それには成員の自主性と出入り自由な雰囲気、そして連帯と助け合いが不可欠である。それはすでに Wenger（1998）や Wenger et al.（2002）でも述べられているが、そのような要素をいかに実践共同体に付加するかについては十分に議論されていない。サードプレイス論はその点において有効である。

Oldenburg（1989）はサードプレイスの特徴に、⑴中立の領域である、⑵人を平等にする、⑶会話が主な活動である、⑷たいてい近所にあり、利用しやすい、⑸常連がいる、⑹雰囲気に遊び心がある、の 6 点にまとめている[137]。中立性、平等性、利用しやすさ、遊び心といった要因は、実践共同体にとっても必要な要因である。関心や熱意による集団学習を自発的に継続して実施するには、成員の相互作用によるモティベーション維持が欠かせない（松本、2014）。サードプレイス論はその点を明らかにしている。

より具体的にサードプレイスの恩恵について Oldenburg（1989）は、⑴目新しさ、⑵人生観、⑶心の強壮剤、⑷社交性のパラドックス、の 4 点にまとめている。これはそのまま実践共同体の学習を促進する要因としても考えられよう。実践共同体は企業組織と異なる場、「距離を取ること」によって学習を促進する（松本、2015）。⑴目新しさはそのギャップから生まれる。また⑵人生観は実践共同体による学習が知識や技能の獲得にとどまらない、参

137）Oldenburg（1989：邦訳）、90-92ページ。

加を通じた実践による総合的な学習であることを示している。キャリアの確立（荒木、2007；2009）という目的はその１つである。⑶心の強壮剤は先ほど述べた学習意欲にかんする意味と、問題解決や不安の解消といった意味の両方を含んでいる。そして⑷社交性のパラドックスは、社交場の関係を結ぶ相手から自己を護らなくてはならないこと、すなわち職場に幼なじみの友人を乱入させてはならないが、友人関係を維持する自由も重要である、ということである。サードプレイスは社交性のパラドックスを解消する装置であるとともに、一人ずつでは友人になれなくても、そこに集う人々をひとまとまりに考えることで友人関係を広げることができるのである[138]。

Oldenburg（1989）の提唱するサードプレイスは実践共同体の上位概念とも考えることができるが、「共同体」ベースの学習促進要因を考える上で有効な示唆をもたらしているのである。

３．プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティと実践共同体

プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ（PLC）は、教員の学習のためのコミュニティを基盤にした学びの場である。それは教員組織の実践共同体ということができる。

Hord（2006）は、プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティを、持続的なプロフェッショナル的学習を通じて教授の質を高めるコミュニティであるとし、それを可能にする５つの要素をあげている。それは、⑴共有された信念、価値、ヴィジョン、⑵分散的・支援的リーダーシップ、⑶構造的・関係的に支援された状態、⑷集合的な・意図的学習とその応用、⑸共有された個人の実践、の５つであるとした[139]。もちろんこれは実践共同体にも通底するところであるが、区別する点でもあるといえる。まず⑴に関わるところであるが、PLC は教育に変革をもたらす学習を目的にしているという点である。実践共同体の目的は学習を第一義にすることであるが（松本、2015）、

138）Oldenburg（1989：邦訳）、123-130ページ。
139）Hord（2006），pp.10-12.

その目的は個人の関心（類似関心）に基づいている。次に(2)(3)にかんするところであるが、PLC は学校組織、あるいは地域コミュニティからの支援を強く意図している点である。実践共同体はその自律性を維持することを重んじ、制度化されたり組織に吸収されたりすることは最終段階の「変容」であるとされているが（Wenger et al., 2002）、PLC はむしろ学校内で孤立しないよう、リーダーの庇護を受けたり地域コミュニティと連携することが推奨されている。それは学校組織の宿命ともいえる。そして(4)(5)にかんすることであるが、その実践は現場への還元が前提となっていることである。実践共同体においては企業組織と実践共同体の間の循環的学習が有効であるとされているが（松本、2015）、その点は PLC はより強く意識されている。

そしてもう 1 つ PLC 研究に特徴的なのは、重層的な実践共同体構造が推奨されていることである。学校内でも教員組織、校長・教頭・リーダーを合わせた学校組織、地域コミュニティ、他の学校との連携、企業・社会との連携、異文化交流と、多様な実践共同体のレベルで構築し、社会的プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ（social professional learning community: Mulford, 2007）、拡張された共同体（extended community: Stoll, Bolam, and Collarbone, 2002）、というような概念として提唱されている。実践共同体の重層的構造は成員の相互作用を活性化し学習を促進するが（松本、2015）、その点をより強く意識しているのが PLC である。実践共同体のあるべき姿を示しているといえよう。

Ⅳ　おわりに

本論文ではコミュニティ概念、「サードプレイス（the third place）」論、「プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ」（professional learning community）概念と、実践共同体（communities of practice）の概念について検討してきた。いずれの概念も実践共同体とは少し異なっており、その違いをもとに実践共同体の概念を精緻化することができたと考えている。実践共同体にとって有効な示唆を引き出すことができた。

（筆者は関西学院大学商学部教授）

＜参考文献＞

Abercrombie, N., Hill, S. and Turner, B. S. (1994). *The Penguin dictionary of sociology*, 3rd ed. London: Penguin Books.（丸山哲央監訳・編集［2005］.『新版・新しい世紀の社会学中辞典』京都：ミネルヴァ書房。）

Ancona, D. and Bresman, H. (2007). X-Teams: How to build teams that lead, innovate, and succeed. Boston, MA: Harvard Business School Press.（サイコム・インターナショナル監訳・西田忠康・鈴木立哉翻訳［2008］.『Xチーム：分散型リーダーシップの実践』東京：ファーストプレス。）

荒木淳子（2007）.「企業で働く個人の『キャリアの確立』を促す学習環境に関する研究―実践共同体への参加に着目して―」『日本教育工学会論文誌』第31巻第1号、15-27ページ。

荒木淳子（2009）.「企業で働く個人のキャリアの確立を促す実践共同体のあり方に関する質的研究」『日本教育工学会論文誌』第33巻第2号、131-142ページ。

Bauman, Z. (2001). Community: Seeking safety in an insecure world. Cambridge: Polity.（奥井智之訳［2008］.『コミュニティ：安全と自由の戦場』東京：筑摩書房。）

Blanchot, M. (1983). *La communauté inavouable*. Paris: Editions de minuit.（西谷修訳［1997］.『明かしえぬ共同体』東京：筑摩書房。）

Bolam, R., Stoll, L. and Greenwood, A. (2007). The involvement of support staff in professional learning communities. In L. Stoll, & K. S. Louis, (Eds.), Professional learning communities: Divergence, depth and dilemmas. Berkshire, England: Open University Press. pp. 17-29.

Brown, J. S. and Duguid, P. (1991). Organizational learning and communities-of-practice: Toward a unified view of working, learning, and innovation. *Organization Science*, Vol. 2, No. 1, pp. 40-57.

Cohen, A.P. (1985). *The symbolic construction of community*. London; New York: Routledge.（吉瀬雄一訳［2005］.『コミュニティは創られる』東京：八千代出版。）

Cross, K. P. (1998). Why Learning Communities? Why Now? *About Campus*, Vol. 3, Issue. 3, pp. 4-11.

Delanty, G. (2003). Community. London: Routledge.（山之内靖・伊藤茂訳［2006］.『コミュニティ：グローバル化と社会理論の変容』東京：NTT 出版。）

Edmondson, A. C. (2012). *Teaming: how organizations learn, innovate, and compete in the knowledge economy*. San Francisco: Jossey-Bass.（野津智子訳［2014］.『チームが機能するとはどういうことか：「学習力」と「実行力」を高める実践アプローチ』東京：英治出版。）

Engeström, Y. (2008). *From teams to knots: Activity-theoretical studies of collaboration and learning at work*. New York: Cambridge University Press.（山住勝広・山住勝利・蓮見二

郎訳［2013］.『ノットワークする活動理論―チームから結び目へ』新曜社。）
船津衛・浅川達人（2014）.『現代コミュニティとは何か：「現代コミュニティの社会学」入門』東京：恒星社厚生閣。
Gronn, P.（2003）. Leadership: Who needs it? *School Leadership and Management*, Vol. 23, No. 3, pp. 267. 290.
Hargreaves, A.（2007）. Sustainable professional learning communities. In L. Stoll, & K. S. Louis,（Eds.）, *Professional learning communities: Divergence, depth and dilemmas*. Berkshire, England: Open University Press. pp. 181-195.
Hillery, G. A.（1955）. Definitions of community: *Areas of agreement. Rural Sociology*, Vol. 20, pp. 111-123.
広井良典（2010）.「コミュニティとは何か」広井良典・小林正弥編著『コミュニティ：公共性・コモンズ・コミュニタリアニズム』東京：勁草書房、11-32ページ。
Hooks, B.（1990）. *Yearning*. Boston: South End Press.
Hord, S. M.（2008）. Evolution of the professional learning community. *Journal of Staff Development*, Vol. 29, No. 3, pp. 10-13.
市川伸一（2001）.『学ぶ意欲の心理学』東京：PHP 研究所。
Jackson, D. and Temperley, J.（2007）. From professional learning community to networked learning community. In L. Stoll, & K. S. Louis,（Eds.）, *Professional learning communities: Divergence, depth and dilemmas*. Berkshire, England: Open University Press. pp. 30-44.
香川秀太・青山征彦（2015）.『越境する対話と学び：異質な人・組織・コミュニティをつなぐ』東京：新曜社。
黒澤祐介（2010）.「ケア・コミュニティ・世代間交流」広井良典・小林正弥編著『コミュニティ：公共性・コモンズ・コミュニタリアニズム』東京：勁草書房、179-189ページ。
Lave, J. and Wenger, E.（1991）. *Situated cognition: legitimate peripheral participation*. Cambridge: Cambridge University Press.（佐伯胖訳［1993］『状況に埋め込まれた認知：正統的周辺参加』産業図書。）
Lefebvre, H.（1974）. *La production de l'espace*. Paris: Anthropos.（斎藤日出治訳［2000］.『空間の生産』東京：青木書店。）
Little, J. W.（2002）. Locating learning in teachers' communities of practice: opening up problems of analysis in records of everyday work. *Teaching and Teacher Education*, Vol. 18, pp. 917-946.
Little, J. W. and Horn, I. S.（2007）. 'Normalizing' problems of practice: converting routine conversation into a resource for learning in professional communities. In L. Stoll, & K. S. Louis,（Eds.）, *Professional learning communities: Divergence, depth and dilemmas*. Berkshire, England: Open University Press. pp. 79-92.
MacIver, R. M.（1924）. *Community: a sociological study: being an attempt to set out the nature and fundamental laws of social life* London: Macmillan.（中久郎・松本通晴［2009］.『コミュニティ：社会学的研究：社会生活の性質と基本法則に関する一試論』京都：ミネルヴァ

書房。）

MacIver, R. M. and Page, C. M.（1949）. *Society: an introductory analysis.* New York: Rinehart.

Maffesoli, M.（1988）. *Le temps des tribus: le déclin* de *l'individualisme dans les sociétés de masse.* Paris: Méridiens Klincksieck.（古田幸男訳［1997］.『小集団の時代：大衆社会における個人主義の衰退』東京：法政大学出版局。）

Maffesoli, M.（1993）. La contemplation du monde: figures du style communautaire. Paris: B. Grasse.（菊地昌実訳［1995］.『現代世界を読む：スタイルとイメージの時代』東京：法政大学出版局。）

松原治郎（1976）.『コミュニティの理論と実践』学習研究社。

松本雄一（2011）.「教育サービス会社の人材育成と実践共同体の構築」『経営行動科学学会第14回年次大会発表論文集』442-447ページ。

松本雄一（2013）.「『学習する組織』と実践共同体」関西学院大学『商学論集』第61巻第２号、1-52ページ。

松本雄一（2015a）.「生涯学習論と実践共同体」関西学院大学『商学論究』第62巻第４号、51-98ページ。

松本雄一（2015b）.「実践共同体構築による学習についての事例研究」『組織科学』第49巻第１号、53-65ページ。

三船康道・まちづくりコラボレーション（2009）.『まちづくりキーワード事典（第３版）』京都：学芸出版社。

Mitchell, G. D.（1979）. A new dictionary of sociology. London: Routledge and Kegan Paul.（下田直春監訳［1987］.『新社会学辞典』新泉社。）

Mitchell, C. and Sackney, L.（2007）. Extending the learning community: A boarder perspective embedded in policy. In L. Stoll, & K. S. Louis,（Eds.）, P*rofessional learning communities: Divergence, depth and dilemmas*. Berkshire, England: Open University Press. pp. 30-44.

Mulford, B.（2007）. Building social capital in professional learning communities: importance, challenges and a way forward. In L. Stoll, & K. S. Louis,（Eds.）, *Professional learning communities: Divergence, depth and dilemmas*. Berkshire, England: Open University Press. pp. 166-180.

中村八朗（1973）.『都市コミュニティの社会学』東京：有斐閣。

Nancy, J.（1999）. *La communauté désœuvrée*. Paris: C. Bourgois.（西谷修・安原伸一朗訳［2001］.『無為の共同体：哲学を問い直す分有の思考』東京：以文社。）

大河内瞳（2015）.「Professional learning community における教師の学び: タイの大学で教える日本語教師のケース・スタディ」『阪大日本語研究』第27巻、195-221ページ。

Oldenburg, R.（1989）. The great good place: cafés, coffee shops, bookstores, bars, hair salons and other hangouts at the heart of a community. New York: Paragon House.（忠平美幸訳［2013］.『サードプレイス：コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』東京：みすず書房）

Park, R. E. and Burgess, E. W.（1921）. Introduction to the science of sociology. Chicago:

University of Chicago Press.

Perlman, R. and Gurin, A. (1972). Community organization and social planning. New York: Wiley. (岡村重夫監訳［1980］.『コミュニティ・オーガニゼーションと社会計画』東京：全国社会福祉協議会。)

Ross, M. G. (1955). Community organization: theory and principles. New York: Harper & Brothers. (岡村重夫訳［1968］.『コミュニティ・オーガニゼーション：理論・原則と実際』東京：全国社会福祉協議会。)

Schein, E. H. (1985). *Organizational culture and leadership: a dynamic view*. San Franciso: Jossey-Bass. (清水紀彦・浜田幸雄訳［1989］.『組織文化とリーダーシップ：リーダーは文化をどう変革するか』東京：ダイヤモンド社。)

Seifter, H. and Economy, P. (2001). Leadership Ensemble: Lessons in Collaborative Management from the World's Only Conductorless Orchestra. New York: Times Books. (鈴木主税訳［2002］.『オルフェウス・プロセス：指揮者のいないオーケストラに学ぶマルチ・リーダーシップ・マネジメント』東京：角川書店。)

Senge, P. M. (1990). *The fifth discipline: The art & practice of the learning organization*. New York: Doubleday/Currency. (枝廣淳子・小田理一郎・中小路佳代子訳［2011］.『学習する組織―システム思考で未来を創造する』東京：英治出版。)

Senge, P. M., Cambron-McCabe, N., Lucas, T., Smith, B., Dutton, J. and Kleiner, A. (2012). *Schools that learn: A fifth discipline fieldbook for educators, parents, and everyone who cares about education*. New York: Doubleday. (リヒテルズ直子訳［2014］.『学習する学校：子ども・教員・親・地域で未来の学びを創造する』東京：英治出版。)

Sennett, R. (1998). The corrosion of character: The personal consequences of work in the new capitalism. New York: W. W. Norton. (斎藤秀正訳［1999］.『それでも新資本主義についていくか：アメリカ型経営と個人の衝突』東京：ダイヤモンド社。)

Soja, E. W. (1996). Thirdspace: Journeys to Los Angeles and other real-and-imagined places. Malden, Mass.: Blackwell. (加藤政洋訳［2005］.『第三空間：ポストモダンの空間論的転回』東京：青土社。)

Stoll, L., Bolam, R. & Collarbone, P. (2002). Leading for change: Building capacity for learning. In K. Leithwood & P. Hallinger (eds), *Second international handbook of educational leadership and administration*. Dordrecht: Kluwer. pp. 41-73.

Stoll, L., Bolam, R., McMahon, A. Wallace, M. and Thomas, S. (2006). Professional learning communities: A review of the literature. *Journal of Educational Change*, Vol. 7, pp. 221-258.

Stoll, L. and Louis, K. S. (2007). Professional learning communities: elaborating new approaches. In L. Stoll, & K. S. Louis, (Eds.), Professional learning communities: Divergence, depth and dilemmas. Berkshire, England: Open University Press. pp. 1-13.

鈴木広編 (1978).『コミュニティ・モラールと社会移動の研究』京都：アカデミア出版会。

Tönnies, F. (1935). Gemeinschaft und gesellschaft: Grundbegriffe der reinen soziologie. Darmstadt: Wiss. Buchges. (杉之原寿一［1957］.『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト：

純粋社会学の基本概念』東京：岩波書店。）

Tosey, P. (2006). The learning community: A strategic dimension of teaching and learning? P. Jarvis (ed.) *The theory and practice of teaching: 2nd edition*. London: Routledge. pp. 169-187.（「学習コミュニティ―『教えること／学ぶこと』の方法論的な次元とは？」渡邊洋子・吉田正純監訳［2011］『生涯学習支援の理論と実践「教えること」の現在』明石書店、269-291ページ。）

Turner, V. W. (1969). *The ritual process: structure and anti-structure*. London: Routledge & K. Paul.（冨倉光雄訳［1996］.『儀礼の過程』東京：新思索社。）

Wellman, B. (2001). Physical place and cyberplace: The rise of personalized networking. International Journal of Urban and Regional Research. Vol. 25, No. 2, pp. 227-252.

Wenger, E. (1998). *Communities of practice: learning, meaning, and identity*. Cambridge: Cambridge University Press.

Wenger, E., McDermott, R. & Snyder, W.M. (2002). *Cultivating communities of practice*. Boston, MA: Harvard Business School Press.（野村恭彦監修，櫻井祐子訳［2002］.『コミュニティ・オブ・プラクティス―ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』東京：翔泳社。）

Westheimer, J. (2008). Learning among colleagues: Teacher community and the shared enterprise of education. In M. Cochran-Smith, S. Feiman-Nemser, & D. J. Mclntyre, (Eds.), *Handbook of research on teacher education: Enduring questions in changing contexts* (3rd ed.). New York: Routledge. pp. 756-783.

横浜市企画局政策部調査課（1994）.「特集・横浜のコミュニティ施策―市民と行政のパートナーシップを求めて」『調査季報』120号。